

平成 29 年度地域リーダー実践（上級）実践報告

平成 29 年（2017）年度

岐阜大学 地域協学センター



目次

平成 29 年度地域リーダー実践（上級）実践報告

1.教育プログラムと講義の概要	1
2.関チームの取組み	3
3.中津川チームの取組み	5
4.土岐チームの取組み	8
5.郡上チームの取組み	11
6.総括	14
7.謝辞	16

各チームの成果物

1.関チーム（イベントチラシ）	17
2.中津川チーム（パンフレット）	19
3.土岐チーム（アンケート結果報告）	23
4.郡上チーム（U,I ターン者インタビュー報告書）	35

平成 29 年度地域リーダー実践（上級）

実践報告

1. 教育プログラムと講義の概要

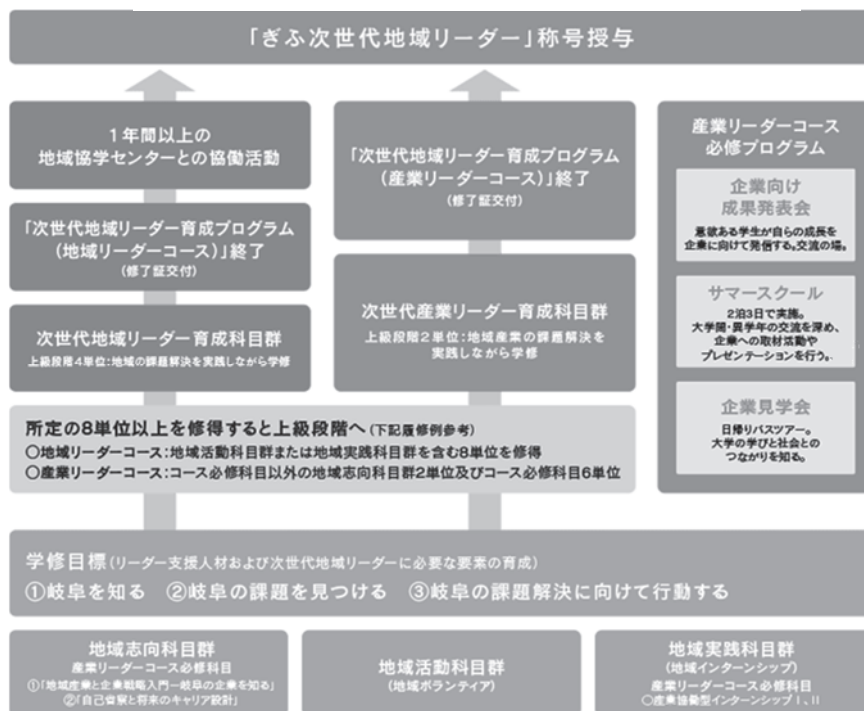
1-1. 次世代地域リーダー育成プログラムについて

「次世代地域リーダー育成プログラム」は、「地域を知り」、「地域の課題を見つけ」、「地域の課題解決に向けて行動する」能力、すなわち、「地域リテラシー」を備え、自身の専門的能力をより実践的に応用することにより、地域の中でリーダーシップを発揮できる人材、並びにリーダーを支援する人材である「次世代地域リーダー」を育成することを目的とするプログラムである。平成 27 年度から岐阜大学の全学で展開しており、平成 28 年度からは産業界ニーズに特化する産業リーダーコースも新設した。

この教育プログラムを通じて、学生は、地域について学び、地域における体験や地域との交流を深め、地域の課題解決に参画する中で、地域の現状の把握や地域の課題解決に貢献できる知識・理解・意欲・能力など、社会に出てから役立つ実践力を習得する。

また、いずれのコースも初級段階と上級段階に分かれており、初級段階では、地域で専門的能力を実践的に応用して活動するために、基盤的能力における「進める力」、「伝える力」、「考える力」の基礎的な素養や能力を身につけることを目指す。初級段階にて所定の 8 単位以上を修得した者等が上級段階の履修を認められる。上級段階では、地域社会あるいは地域の産業界を活動の場とし、基盤的能力を活かして、より実践的に専門的能力を応用するための実行力を身につけることを目指す。

図 1-1.次世代地域リーダー育成プログラム概要



1-2. 地域リーダー実践（上級）の講義概要

地域リーダー実践（上級）は、次世代地域リーダー育成プログラム地域リーダーコースの上級段階科目である。実際の地域の課題解決等に向けて実践的に取り組むことで、地域の中でリーダーシップを発揮できる人材、あるいはリーダーを支援する人材として必要な素養や能力を養うことを狙いとする。

全学共通教育科目の性質上、前期は「地域リーダー実践（上級）Ⅰ」、後期は「地域リーダー実践（上級）Ⅱ」として科目が分かれているが、実質的には通年科目である。平成27年度から開講しており、平成25年度は9名（含聴講生1名）、平成26年度は10名（後9名）の受講があった¹。

これまでボランティア経験を考慮する等、個別に受講資格を認定する必要がある受講生がいたが、開講3年目である平成29年度受講生については「初級段階の所定の8単位以上を修得した者」として全22名の受講生が認定された（表1）。

受講生が倍増したことに伴い、チームも4編成となった。ガイダンスで4か所の候補地と担当者を伝え、受講生の希望をベースに学部のバランスを踏まえて教員側でチームメンバーを決定した。その後は各チームで活動に取り組み、前期修了時に中間報告、後期修了時に最終発表を合同で実施した（図2）。

図 1-2. 講義の流れ

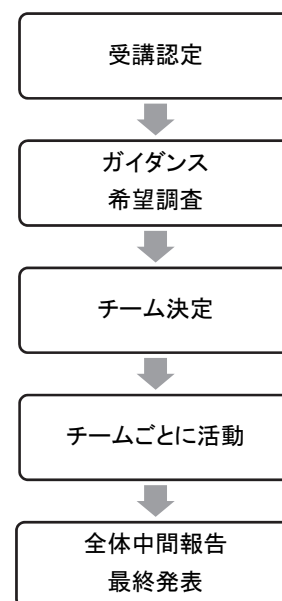


表 1-1. チーム別受講生属性一覧

①関チーム（5名）		②中津川チーム（5名）	
所属・学年	人数	所属・学年	人数
工学部3年	1名	工学部3年	1名
工学部2年	1名	教育学部3年	2名
地域科学部2年	3名	地域科学部3年	1名
		工学部2年	1名
③土岐チーム（6名）		④郡上チーム（6名）	
所属・学年	人数	所属・学年	人数
工学部3年	1名	応用生物科学部3年	1名
応用生物科学部2年	1名	教育学部3年	3名
地域科学部2年	4名	地域科学部2年	2名

¹ 塚本・大宮・益川「次世代地域リーダー育成プログラム上級段階「地域リーダー実践（上級）Ⅰ、Ⅱ」実践報告」岐阜大学教育推進・学生支援機構2016『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』第2号132-146頁

塚本・大宮・益川「平成28年度「地域リーダー実践（上級）Ⅰ、Ⅱ」実践報告」地域協学センター2017『地域志向学研究』2017年第1巻24-28頁

2. 関チームの取組み（今永・松林）

2-1. 取組み全体像

岐阜県関市は中濃圏域に位置し、イギリスのシェフィールド、ドイツのゾーリンゲンと並ぶ世界三大刃物のまちと言われている。近年は、最盛期と比較し売上、事業者数とも減少、後継者獲得に苦しむなどの課題を抱えている。また関市の企業は OEM とよばれる相手先ブランドでの製造を実施する企業が多く、自社の広報力・企画力・ブランド力を育成する機会が不足しているといった課題が存在する。そこでその課題を解決するために、NPO 法人 ORGAN が中心となって実施する「長良川おんぱく」へ、関の企業と連携し「地域リーダー実践」のテーマの一つとして、学生が企画を検討し実施することとなった。

岐阜大学と NPO 法人 ORGAN は、平成 28 年 8 月観光地域づくりに関する協定を締結した。ORGAN は「長良川おんぱく」をはじめとする長良川流域の観光地づくり推進に取り組む NPO 法人で、この協定は互いの人的資源等を活用し、相互の幅広い連携・協力関係により、長良川流域の観光地づくりに対する諸課題に取り組み、人材育成や新たな地域活力の創出に寄与することを目指している。

今回は、岐阜県信用金庫、関信用金庫、八幡信用金庫、長良川流域観光推進協議会が主催し、ORGAN が共催する「長良川流域の地域資源を活用した観光事業拡大セミナー」に連携する形で協働した。当該セミナーに参加した信用金庫の取引先企業の中から、学生との連携を希望する株式会社ミュウ（関市：理美容ハサミの製造・販売）と協働して取り組んだ。

2-2. 受講学生について

参加学生は 5 人であった。工学部 3 年生が 1 人、工学部 2 年生が 1 人、地域科学部 2 年生が 3 人であった。過去に「長良川おんぱく」や類似した行事において企画を実施した経験を有する学生が 2 人存在した。地域協学センターの特任助教の今永・松林の 2 人が担当した。

2-3. 企画概要

株式会社ミュウは理美容鋏を製造・販売している。高度な技術力を有し、理髪店・美容院向けに 1 本 10 万円以上する高級鋏を販売しているが、一般消費者向けには商品を販売しておらず、認知度の低さが課題である。そこで、一般の人に対し、関の刃物の魅力を伝える工場見学や、刃物の切れ味体験などを実施するイベント企画を実施した。学生が企業との調整のために、自らアポイントを取り、企画実施へ向け提案した。企業と学生で協議を進め、包丁を製造する利隆刃物製造の協力を得た。

学生は 7 月末の投稿締め切りまでに、広報原稿を完成させるために打ち合わせを実施した。企業の理解のために訪問し、工場見学を実施し社長の考え・想いをインタビューした。

11月3日（金・祝）の午前・午後2回企画が実施された。参加者は定員20名に対して20名が申し込み、満員であった。

図 2-1：長良川おんぱくへの記事

【岐大生×匠(鉋・包丁)コラボ企画】

刃物の町「関」では、刀匠の技術を用いた切れ味鋭い刃物を作る会社があります。この度、私達岐阜大学生5人は半年間かけ、細部にまでこだわった理美容鉋、包丁の製造企業2社を堪能できる企画に仕上げました。今回私達とコラボする会社は、日本文化を紹介する雑誌「ディスカバージャパン」に掲載され、海外からも職人・バイヤーがやってくるほどのすごさです！当日は匠の技への挑戦や、刃物素材を使ったものづくり体験ができます。

2-4. おわりに

学生は、「長良川おんぱく」のプログラム企画立案・実施を通して、企業と協働して一つの企画を実施する体験ができた。実際の企画を立案し完成させるプロセスを通して、企業の立場や参加者の立場に立つことの重要性を学び、広く関の刃物業界の特色や、2社の企業の強みである技術力を伝えるために、試行錯誤して取り組んだ。

また、実際に話を聞き、パネルなどの展示物を完成させ、学生が関の刃物の特徴を理解し、「長良川おんぱく」の参加者への説明を通して、学生が関の刃物業界についての理解が深まったと感じている。関の刃物について詳細にヒアリングを重ねながら、包丁、ハサミができるプロセスの理解が深まり、関の刃物業界が抱える高齢化による後継者不足の問題などを実感するなどの学習効果も大きかった。

2-5. 謝辞

岐阜信用金庫、NPO 法人 ORGAN、株式会社ミュウの堀社長、利隆刃物製造の玉田代表をはじめとした関係者の皆様には、企画段階から当日の運営、その関の学生指導などを含めまして、多大なるご協力を賜り、感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

改めて関係者の皆様には深謝申し上げます。本当に有難うございました。

3. 中津川チームの取組み（大宮）

3-1. 中津川市阿木（あぎ）地域について

今年度、中津川チームが対象とした阿木地域は、岐阜県東濃にある中津川市の南部に位置する。阿木地域は、中津川市の中心市街地よりも隣接する恵那市のほうが近く、明知鉄道で20分、車でも20分ほどで移動でき、買い物や交通と言った生活は、主に恵那市に頼る場合が多いと聞く。また、平成30年2月末現在で人口2249人（世帯数821世帯）であり、中津川市内の他地域に比べると人口の少ない地区であり、シクラメンや蕎麦の栽培が盛んであり、阿木川が流れ、田園が広がる自然豊かな地域である。

阿木地域は、昨年度も「地域リーダー実践（上級）」で学生を受入れていただいた地域であり、毎年開催される特産安岐そば・シクラメン祭りのリニューアルをテーマに、岐阜大学生が「シクラメン花冠ワークショップ」を企画・実施した。また、平成26年度から岐阜大学と阿木地域は、域学連携事業でぎふフューチャーセンターを実施するなどの連携実績があり、学生の受入れ環境が整っていた。

これまでの連携活動を基盤として、今年度も中津川市民協働課や阿木事務所、地域の方々からの大きな支援のもと、中津川チームが阿木地域の課題解決に向けて取り組むことができた。

3-2. 地域の課題

中津川チームは、教育学部3年生が2人、地域科学部3年生が1人、工学部3年生が1人、同じく工学部2年生が1人の計5人のメンバーで構成されたチームであった。また、昨年度の中津川チームのメンバーであり、次世代地域リーダー育成プログラムの修了生である教育学部4年の学生がSA（スチューデント・アシスタント）として関わった。

今年度、中津川市から提示されたテーマは、若者や子育て世代を阿木地域に呼び込んで移住してもらうための取組みを考えるというものであった。

学生らは、4月から5月にかけて、阿木に関する情報や他県の移住定住に関する先行事例を調べ、また、実際に阿木地域を訪れ自分たちの目で地域を見学し、地域の方々から移住定住の様子についてインタビューをするなど地域を知ることから始めた。これらの情報収集やインタビューで得られた情報を整理分析し、移住定住における課題を洗い出すことができた。移住定住においては、移住を望む人たちと移住を受け入れる地域の人たちの考え方にズレがあること、子育て世代を対象とした際に一括りに捉えることができないこと（例えば、子供の年齢や学年によって現実的な移住へのハードル、移住先で求める環境の違い）などを把握することができた。また、阿木の良さとして、教育施設（保育園から中学校、高等学校までが地域内にある）・コミュニティ・自然環境といった観点から、子育てのしやすさが一番にあげられる。

7月にこの調査分析結果を阿木地域の方々に向けて中間報告を行った。中間報告の場では、

地域の方々（実際に阿木に移住した住民も含む）から改めて移住定住に関する意見や考え、要望を得ることができ、今後の活動につなげることができた。

ここまでの情報収集から調査分析、中間報告を通して、移住における阿木地域での課題を整理することができた。阿木地域で解決すべき課題は地域内外に向けた情報発信、地域住民同士の意識の共有であるとして、「住民全体を巻き込んで行う PR 活動」を活動方針とした。課題解決の方法として、学生らは「PR 動画の制作」、「パンフレットの制作」、「移住体験ツアーの企画・実施」を検討した結果、現実的な観点から「パンフレットの制作」を行うことに決定した。

3-3. パンフレットの作成

上述した現地調査、インタビュー、地域の課題整理を通して、移住を促進する「住民全体を巻き込んだ PR 活動」を方針に移住促進パンフレットを作成することを決定した。

パンフレットのコンセプトは、阿木には「子育てのしやすい」環境があること、地域住民が子育て世代の移住を求めていることから、若い夫婦の移住を促進するパンフレットを作成することとした。将来子育てをする予定である、もしくは幼い子どもを既に育てている若い夫婦を対象にすることで、阿木の良さを活用することができると考えた。

パンフレットの内容は、良いことばかりではなく不便なところなどデメリットも含めて、阿木の実際の生活をイメージしてもらえるものとした。そのためには、質問事項を改めて検討したうえで、地域住民の方々との 1 対 1 でのインタビュー、またインタビューができない方には調査依頼書を送付して回答をいただき、地域の生の声を収集した。さらに工夫した点は、阿木に実際に移住した方から阿木に移住した経緯（ストーリー）や一日のスケジュールを詳細にインタビューし、阿木に移住すること、阿木での生活を読み手に伝えられるような内容を掲載した。パンフレットのデザインは、プロのデザイナーにアドバイスをもらったことで、女性が手に取りやすいデザインとするなど、より具体的な読み手を想定したうえで、パンフレットのデザインを改善することができた。

最終的なパンフレットは、阿木の一般情報（特徴・行事・コミュニティ・学校・アクセス）から移住ストーリー、Q&A 形式の移住に関する情報を掲載し、学生が収集した情報を読みやすくまとめることができた。

作成した「移住促進パンフレット」は、中津川市役所や岐阜県庁の方々にご協力を仰ぎ、市役所や県庁、アンテナショップ等での配置、各種行事での配布、移住定住に関連するホームページへの掲載を依頼し、パンフレットの活用を図っている。

3-4. 学生による振り返り

学生は、中間発表（地域向け、学内向け）から最終報告（地域向け、学内向け）を通して、自身の活動を振り返ることができた。また、地域からのコメントや質問などから自分たちの活動について評価を得ることで、より客観的な視点での振り返りを行うことができた。

以下は、中津川チーム全体また個人の振り返りの声である。

<良かった点>

- ・元々住んでいる人の考えと、移住してきた人の考えにズレがあることが分かったこと
- ・より良いパンフレットにするために試行錯誤できたこと
- ・阿木という地域について詳しく知ることや関わることができたこと

<反省点>

- ・報告・連絡・相談ができていなかったときがあったこと
- ・パンフレット作成に必要な技術を甘く見積もったこと
- ・予定よりも活動が遅れてしまい、パンフレットの完成がぎりぎりになってしまったこと
- ・巻き込んだ住民は一部であり、住民の意識を変えたかどうかは分からないということ

<メンバー個人からの振り返り（学び）の声（一部）>

- ・地域の課題について考えることの難しさとやりがい
- ・提示された要求を掘り下げ、達成要件を自分が考えること
- ・全体で最終的な目標と情報を共有する大切さ
- ・目的を持って活動することの大切さ
- ・計画通りに企画を進めていくことの難しさと重要性

今年 1 年間の活動を通して、学生は地域の課題解決に向けた取組みの難しさ、地域の実情を正確に把握する大切さ、チームワーク（役割分担）の重要性などを学ぶことができた。特に、学生たちは、目標や目的（地域の課題）を見失わず、自分たちが何のために活動を行っているかを常に意識することの重要性を学び取ることができたのではないかと考えている。

3-5. まとめ

今年度の中津川チームは、リーダーを中心にメンバーが、情報収集・調査分析から課題把握、活動内容の決定に至るまで主体的に取り組んだことで、質の高いパンフレットを完成させることができ、学生自身にとって自信となる成果であったと言える。阿木地域に向けても、実際に活用可能な成果物を還元できたことは、とても意義のある取り組みとなった。また、次世代地域リーダー育成プログラムの修了生を SA として配置したことで、地域住民との関わり方や課題の考え方、客観的な視点からのアドバイスがあり、メンバーにとってとても重要な役割であったと考える。一方で、市役所を含む地域とのスケジュール調整や情報の共有が、指導教員の課題であり、地域との信頼関係があってこそその地域連携であると改めて痛感した。

最後に、学生を受入れていただき、多大なご支援をいただいた中津川市市民協働課の中尾様をはじめ、阿木事務所の林所長、阿木の皆様に心より御礼申し上げます。

4. 土岐チームの取組み（後藤）

4-1. 地域の概要

土岐市土岐津町高山地区は、JR 土岐市駅から約 1km ほどの住宅地で、人口約 1800 人、約 700 世帯で、陶磁器産業を主産業とする地域である。豊かな歴史と文化のある地域であり、高山城高山宿史跡保存会(以下、「保存会」とする。)を中心として歴史、文化や自然を活かした地域づくりに取り組んでいる。保存会では、行政や他の団体との連携・協力をしつつ、土岐高山城跡の森の利活用、子どもの自然体験プログラム「里山わいわい広場」、土岐高山城戦国武将隊、高山城戦国合戦まつりなど、さまざまな事業を展開している。土岐チームでは、保存会をはじめとした土岐市内の多くの地域住民の方々、土岐市役所の方々と連携・協働しつつ、活動を展開した。

4-2. 学生の取組み内容

土岐チームは、2017 年 6 月に初めて現地を訪問した。初回の現地調査では、保存会から地域づくりの取り組み状況、土岐市役所職員の方々からは、若者の流出等の土岐市が抱える課題、観光・産業の実態、まちづくりや市民協働への取り組みなどについての説明、高山城跡の森、物見櫓、陶磁器の窯元等の見学を行い、地域の課題や実態の調査を行った。

初回の現地調査の後、定例ミーティング(週 1 回、昼休み)において現地調査で得られた情報を整理した。土岐市の抱える課題は、人口減少、特に若者の流出にあり、その原因は進学、結婚、就職である。この課題を踏まえて、土岐チームでは、当初人口流出の防止・抑制に取り組むことを考えたものの、繰り返し検討する過程で、直接対応策を実行することは困難であるとの結論に達した。そこで、子どもたちに土岐に誇りを持ち、土岐を好きになってもらうことを意味する「土岐ラブ精神」を育むことをチームの方針と定めた。

9 月には、土岐に在住・通学する人々に土岐の魅力や課題、「土岐ラブ精神」に関する意識調査を実施するため、質問紙の作成に取り掛かった。質問紙の質問項目は、学生の一方向的な調査にならないよう、保存会や地域の方々意見も参考にして、チーム内で議論し決定した。10 月には、作成した質問紙を用いて、高山城戦国合戦まつりにおいて来場者に学生が声かけを行い、質問紙に記入してもらい、質問紙をその場で回収した。11 月 5 日には、土岐チームの学生が、地域住民の方々との連帯感を深めることや交流を目的として、保存会による「穴弘法もみじと 100 地蔵のライトアップ」で展示するための竹明かりの作成作業に参加した。学生が自分たちでデザインをし、ドリルで穴を開けるなどして、地域住民の方々と一緒に竹明かりを作成した後、保存会で活躍する若者と土岐市の魅力や課題についての意見交換を行った。

このような体験から、土岐チームの学生は、竹を用いたイベントの可能性を見出し、持ち帰りが可能な竹明かりを親子で作成するイベントの開催を企画し始めた。11 月 16 日には、

土岐津小学校附属幼稚園、岐阜県立土岐商業高校、ときつこども園も訪問し、質問紙による意識調査の協力依頼を行い、帰る際には、学生が作成した竹明かりを「穴弘法もみじと 100 地蔵のライトアップ」において見学し、来場者に対して土岐の魅力を発信することに貢献できたことを確認した。

質問紙は、高校生 145 部、子育て世代 71 部、その他の方 41 部の計 257 部を回収することができた。質問紙の集計には、Google フォームを用い、メンバー全員で分担し、各自手作業で入力した。質問紙の選択肢はグラフ化し、自由回答欄は一覧表にした後、学生なりの分析を加えて、最終報告会および現地報告会での配布資料とした。

集計作業と平行して、定例ミーティング(11 月から週 3 回)でイベントのスケジュールや準備が必要な物などのリストアップ、申し込みフォームの作成、施設予約手続きなどを進めた。同時に保存会の方々や市役所職員の方々の協力を得つつ、イベント広報のための原稿案を作成し、土岐市広報誌や SNS 等を利用して情報発信を行った。また、イベントのチラシ作りを行い、土岐市役所等市内複数個所で配布した。12 月 9 日には、イベントに必要な竹の切り出しを行い、洗浄後に電動のこぎりで切断した竹を 40 個ほど作成した。また、作成時間等の把握とチラシ掲載のために、試作品を 2 個作成した。

イベント実施日の一週間前の 2018 年 1 月 14 日には、会場(土岐津公民館)を実際に使用して本番と同様の動きを確認した。1 月 21 日には、小学 3 年生までの子どもと保護者を対象として「岐大生プレゼンツ☆親子で作ろう『ここ竹明かり』～デコッチャって!～」と題するイベントを実施した。このイベントでは、子どもに土岐の魅力を伝え、「土岐ラブ精神」の醸成を図るため、土岐の竹を使い、20cm ほどに切った竹に電動ドリルで穴を開け、デコレーションを施した竹明かりを親子で作成した。開催時間は 14～16 時までで、土岐津公民館木工室を会場とし、定員 10 組(1 組 4 人まで)を予定していたが、実際には 11 組 19 名の参加者があった。イベント後のアンケートでも「子どもが楽しめた」「岐大生が県内でこのような活動をしてきて嬉しい」「学生の対応が良かった」など好評であった。

2 月 19 日には、土岐市役所、保存会の方々の協力を得つつ、「若者が考える！土岐市の将来像」とのタイトルで、現地成果報告会を土岐市文化プラザで開催した。土岐市住民、土岐市役所職員、瑞浪市役所職員など多くの方々の参加があった。現地成果報告会では、土岐チームの活動から見てきた地域の課題とその原因、その課題に対する学生の取組内容、学生による土岐市への提言を報告した。土岐市への提言内容は、多くの世代で土岐ラブ精神が低いこと、多くの世代で食べ歩きツアーへの希望があること、高校生の多くがゲーム・アニメ・漫画を趣味としているなどのアンケート分析結果を踏まえ、土岐に来てもらうための高校生向けのゲーム・漫画等と関連させたイベント、駅前活性化を目指した食べ歩きイベントの開催を提案した。現地報告会の議論では、チームの活動を通じて土岐市に住みたくなったか、働きたくなったか、地域・行政・若者の連携における課題や可能性は何か、若者の地域づくりへの参画をどう実現するかなどの議論があった。地域側からは、来年度以降も今年度の成果を活かして、継続して取り組みを進めてほしい旨の要望もあり、大学と土岐市高山地区と

の連携・協働を促進することができた。

4-3. 学生の学修成果や指導上の工夫、反省

土岐チームでは、前期は一度現地に赴いただけで、具体的に何をするのかという部分を決めかねていた。後期から定例ミーティングの回数を増やし、複数回にわたり現地に赴き、保存会をはじめとした地域住民の方々との交流や議論、意識調査の集計や分析、イベントの企画と準備、各種団体との調整などを行うことで、地域の方々との連携・協働が重要であること、地域住民等周りを巻き込んで動くためには自分たちから行動することが大切であることなど、地域リーダーとして必要な認識や技能を獲得することができた。

また、土岐チームの活動に対しては、昨年度上級段階科目を履修した教育学部4年生2名がSAとして支援を行った。土岐チームには、地域に出ることや地域課題の発見と解決策を考えることなどを経験したことがない学生も多く、SAの経験を聞いたり、SAから必要な助言を受けることで議論の行き詰まりを克服することができた。SAの二人は、教員養成課程で学んでいることを活かして、学生の成長の機会を奪うようなことにならないように気をつけつつ、学習者(土岐チームの学生)が自主的に考え、行動する手助けをするための工夫をしながら学生の支援にあたっていた。SAの存在は、チームの活動の支援という立場であったが、チームの学生とSAの間で議論することで互いの地域に対する思考の深まりが垣間見え、両者にとって貴重な学習の機会であったと考えられる。

指導上の工夫に関しては、大学側の視点のみで課題の発見と解決策を一直線で固定してしまうのではなく、地域の現状や地域住民との関係を踏まえて、地域の方々とのどのように協働して調査やイベントを行うのか考えさせ、個々の学生の地域に対する思考を深めていくような指導を心がけた。同時に、地域の方々に自分たちの言動がどのように影響を与えるのかを意識させるような指導も行った。また、土岐チームと現地の方々との間ではSNSのグループトークを用いて連絡を取り合い、地域の情報や発表原稿の共有、連絡調整などで迅速なやり取りができた。

土岐チームの課題・反省点としては、第一に、前期の定例ミーティングを昼休みに行い、学生同士議論をする時間が少なく、具体的な行動に移すことができず、後期に定例ミーティングや現地訪問の機会を増やしたことで後期の活動の負担が大きくなってしまったため、年間スケジュールを立て、しっかりと管理する体制が十分でなかったことが挙げられる。第二に、前期は現地を1回しか訪問しておらず、現地訪問の成果から具体的な議論へとつなぐことが十分にできなかったことが反省点である。第三に、個々の学生の予定や学業との関係でチーム内の意識調査の分析やイベント準備等の作業量に偏りが生じており、役割分担について工夫することが必要であったことが挙げられる。

最後に、来年度以降のチームの活動においては、学生が各学部でそれぞれが学んできた知識や技能をより発揮してもらえるような環境づくりと、文献等を読み込みつつ、学術的な知見を用いたより深い地域の現状や課題の分析が必要と考えられる。今後の課題としたい。

5. 郡上チームの取組み（塚本）

5-1. 母袋地域について

郡上チームが対象とした母袋（もたい）は郡上市大和町の奥に位置する 38 世帯が暮らす小規模集落である。平成 28 年 12 月に「母袋の地域資源を磨き上げよう」と題してぎふフューチャーセンターを開催しており¹、そこから何か取組みを継続したいという地域と大学双方の意向により、「地域リーダー実践（上級）」の受入れ先として関わって頂くこととなった。38 世帯のうち、7 世帯が地域外からの移住者という地域であり、地域おこしの取組みを主として実施している「母袋わくわく会」を窓口として今回の実践を行った。

5-2. チーム決定から課題設定まで

メンバー6人中、前年 12 月のフューチャーセンターに参加していた学生が 1 人おり、この学生は別件で母袋の人々との関係性のある程度持っていた。本人の積極性も手伝ってチーム決定時にこの学生がリーダーとなり、前期の活動を牽引することとなった。

チーム決定後、3 度のミーティングを経て 1 回目の現地見学（5 月 13 日）を実施。見てきたものをベースに自分たちが何に取り組むのかを考えていき、2 回目の現地見学（7 月 1 日）に臨んだうえで、今後の方向性を定めた。

この段階では様々なアイデアが出ては消えている。母袋そのもののウリは何か、母袋の人は何を求めているのか、母袋に何を・なぜ残したいのか、といった切り口でミーティングを重ねたが、いずれのアイデアも全員が納得するものとはならなかった（表 6-1）。

表 5-1. 不採用アイデアとその理由（特に議論したもののみ抜粋）

採用されなかったアイデア	不採用理由
特産品を取り上げてウリにする	特定の店等が儲かるだけで地域全体には還元できない。
歴史的財産を整理する	わざわざ見に来たとしてもリピーターにはならないだろう。
登山者のための整備	登山客が増えてもお金を使う場所がなく、あまり意味がないのでは。
学生が行事を手伝いに行くパイプ作り	岐阜大学学生ボラネット ² に問合せたが、行くための足の保証ができない。学生が行きたいと思うようなメリットがない。
地域のことを知らせる看板設置	看板で行動は変わらない。何を何のためにアピールしたいか不明。

一方で、「母袋の人たちが結局どうして行きたいのかが分からない」という部分が避けられない課題として挙がってきた。そこで論点をさらに整理し、2 回目の現地見学では、特に人を呼び込みたいかどうか、呼び込みたいのであればどんな人に来てほしいのか、現状で良いと考えているのなら今いる人でどうしたいのか、を尋ねることとした。

2 回目の現地見学では考えて来たことを発表し、母袋わくわく会の人々と意見交換を行っ

¹ 地域協学センター2017『ぎふフューチャーセンター実施報告書平成 28（2016）年度版』121-126 頁

² 岐阜大学学生ボラネット…岐阜大学における学生ボランティアの支援組織

た。そこで母袋わくわく会からも「とにかく知名度を上げようと色々なイベントをやってきた。しかし方向性を持たせないとこの先難しいと、自分たちでも感じているところだ。そのために『母袋夢ビジョン』を作成するとして補助金³をとってきた」という状況が提示された。自分たちで行きついた課題と、地域で考えられている課題が一致したことから、見学後のミーティングで何らかの形でビジョン作成を手伝う、という方向性が確定した。

5-3. インタビュー調査の実施と分析

ビジョン作成に必要なことが何かを考え、ビジョンは未設定ながら移住者は欲しいという地域の声を踏まえて、移住者へのインタビューを通じて母袋の特徴を分析しようということになった。中間発表の準備と並行して企画書の作成を進めたが、この際、地域科学部の受講生が「専門の授業でこの前やった」と言ってアンケート調査やインタビュー調査の具体的な手法について資料を提供。企画作成にあたって大きな助けとなった。

38 世帯中 12 世帯の世帯主が移住者もしくは U ターン者であり、日程調整の末 11 世帯 14 人を対象にインタビューを実施することとなった。インタビューは必ず複数名で対応することとして、2泊3日の日程を含む全6日の日程を組み、直接インタビューしたメンバーから担当を決めて聞き取った内容を書き起こした。

今回は UI ターン者にとっての「母袋に移住 (U ターン) した理由」(以下「理由」)「母袋の魅力」(以下「魅力」)を聞き出したい、という趣旨であるため、逐語での文字起こしではなく話の概要を書き起こす形とした。今後の作業提示のため、最初のインタビュー内容は教員が書き起こした。なお、学生の1人がインタビュー自体を1人しか担当できなかったため、村おこしの先進事例の資料⁴を渡し、それをまとめてくるという課題を課している。

書き起こし原稿をベースに「理由」「魅力」に該当すると考えられた部分を付箋に抜き出し、KJ法で全体像をとらえるところまでを10月に実施。整理する中で「母袋の良くない点」(以下「欠点」)も整理する必要がある、として追加で改めて抜き出し整理を行った。この時点でインタビュー調査の成果物として「理由」「魅力」「欠点」をまとめた模造紙3枚が出来上がり、今後の分析の母胎となった。

11月は教育学部生3人が教育実習で不在のため、残るメンバーで報告書の構成等を検討した。内容分析には「移住したいと考えている人の意見が必要」として基準になりそうな資料を検索し、学生が見つけた内閣府及び宮城県亘理町の移住に関する意識調査結果⁵をベースにすることとした。KJ法で書き出した内容をデータ化し、12月に戻ってきたメンバーとそこまでの経緯を共有。整理した分析視点に基づいて、改めて母胎となる3枚の模造紙を整理した。なお、内容をデータ化した際、担当した学生が「同じことが良いようにも悪いよ

³ 平成29年度 郡上市魅力ある地域づくり推進事業補助金を示す。

⁴ 相川俊英『奇跡の村 地方は「人」で再生する』第一章「奇跡の村 下條村」集英社2015

⁵ 第一回まち・ひと・しごと創生会議(平成26年9月19日)資料2『「東京在住者の今後の移住に関する意向調査」結果概要』および第2回亘理町まち・ひと・しごと創生総合戦略委員会(平成27年12月21日)資料2.1「移住・交流・定住に関するアンケート調査結果」

うにも言われている」と気づき、「表裏一体の項目」という形で抜き出しを行っている。

5-4. 報告書の作成と成果報告

年内最後のミーティングでは報告書作成の役割分担を明確にし、まずは冬休み中に最初の原稿を書き上げることにした。また、1月27日に母袋での発表会を行う日程が決まったので、地域住民に参加を呼び掛けるチラシも学生側で作成することとし、合わせて冬休みの宿題として6人それぞれに分担を決めた（表6-2）。

表5-2. 冬休みの宿題 役割分担詳細

担当した役割	役割分担理由
はじめに	企画書作成者
先行研究（先進事例）	村おこし事例をまとめる、という課題の活用
調査方法	アンケート調査に関する資料提供者にして調査参加数最多
分析（後、分析のための視点整理）	意識調査資料に基づく話し合いに参加していた2人のうちの1人
まとめ・謝辞	消去法（但し教員から見て全体を見ようとする視点に優れた学生）
チラシ作成	前期中間発表スライドのメイン製作者

この後は役割に沿って原稿を作成し、個別に文章指導を実施した。ミーティングでは更に細かい分析を行い、原稿の現状を毎回共有している。分析を詳細にする中で、視点整理と分析そのものの項目を明確に分けた方が良いという判断になり、「分析のための視点整理」と「分析」の項目とし、「分析」については元々の分析担当者、チラシを作り終えた学生、まとめを書くために全体の完成を待っている学生の3人で分担して記述した。

完成した報告書は発表会に持参、資料として配布した他に母袋わくわく会への提供資料とした。この発表会は『母袋夢ビジョン』作成のための「夢語り会」の情報提供部分として位置づいており、発表後は引き続き夢語り会に参加してビジョン作成に向けた地域住民との意見交換を行った。

5-5. まとめ

現地での発表会後は、授業の最終発表に向けてスライドを再編集し、発表練習の回を設けたうえで2月13日の発表に臨んでいる。「一般論に帰したのでは」というような意見もあったが、現地に移住した人の生の声から基準を持って導き出した結論であり、それが一般論だったとしても礎として価値あるものを作り出せたと考えている。

途中、学生が一人明らかにモチベーションと共に参加率を落としていっており、他の受講生ともどもどうフォローするかを悩みながらの進捗となったが、最後までやり通せたことは幸いだった。それぞれ文章を書かせる中で、チームが何を考えて来たのかを振り返ることもなり、目的意識の再確認と、活動に対する自信に繋がったように思われる。

次年度も母袋地区は継続して対象とし、今期受講生も何人かSAとして関わる予定である。地域に対して授業としてどの程度のことが可能か、今後も注視していきたい。

6. 総括

6-1. 教員ミーティング

今回は4チームに分かれての実施となったため、担当教員間で6度のミーティングを設けて進捗状況を共有した。5月はひとまず動き出しの状況を確認。7月は全体的にチームとしての方向性が出て来たところだが、ある程度枠組みがあって動き出した関チームは活動の具体性が一歩抜きこんでいた。また、過去2年間の実践や関チームの活動内容はイベントの企画実施だが、今年度の活動内容では関チーム以外の3チームが調査報告の方向性を持っており、それがどのような実践として位置付けられるかを議論した。中間発表直前の8月になるとどのチームも活動内容が概ね明らかになってきていたが、定例ミーティングが昼休みの設定になっていた土岐チームは話を詰めきれていない部分が見受けられた。

夏休みを終えた10月、関チームはイベント本番を間近に控えており、他のチームも実際の活動予定を組み立てていた。また、土岐チームがアンケートとイベントの2本立てになってきたことに対して目的がぶれていないかと議論になった。他に、1チームが別室でミーティングを実施していたため、受講生にとっての環境条件を揃えるためにも、基本的には同じ場所を利用するようという確認を行った。12月は最終発表会の日程候補を提示し、あとは各チーム邁進するのみという状況である。

最終発表会を終えた2月のミーティングは、発表会のアンケート結果を確認することから始まり、成績評価、学生の学びについて確認した。アンケート結果はコメント量がかなり多く、当日の質疑応答でも様々な意見が出ており、地域からの期待の高さがうかがえた。「もう一歩踏み込んで欲しい」という類のコメントも多いが、一方でその期待に講義という枠でどこまで応えられるかという点も課題であり、少なくとも受入れ先については丁寧な説明を繰り返して相互理解を進める必要があると確認された。

6-2. 学生の学び

最終発表会を終えて、いずれのチームとも中間発表より良くなったことは明らかであった。厳しい質問もあったが、学生がきちんと受け答えをしており、これは1年の実践を通して地域の人とのやり取り等で鍛えられた成果だと考えられる。

また、初期は自分以外の人も一緒にやるという事について気が回らない、作業量の見積もりができないといった様子だったのが、次第に相手のペースを配慮したり、ある程度の段取りをつけられるようになってきたりした、という指摘が挙げられた。チーム内での温度差も学生の相互理解が進むにつれて埋まっていき、思うことを言い合うだけだった議論の仕方が「こう思うけどどうか」「ここはやるから、次はこう進めよう」というように建設的に進むようになったという点も、大きな学びの一つであろう。

一方で、次第に授業で取り組んでいるのだという感覚が薄れていくという指摘もあった。

遅刻の連絡をしない、バイトを優先するといった行動が見られるようになり、教員の指摘によって改善はするものの、中だるみに対して今後も留意しておく必要があるだろう。

また、今年度は中津川チームと土岐チームについて、昨年度の上級段階科目修了生 3 人がスチューデント・アシスタント (SA) として運営補助を行った。経験に基づいたアドバイスをくれる先輩の存在は、教員のみから見てグループワークを進める上で非常に有効に機能した。同時に SA 自身も当事者とは少し違う立場からサポートすることで、チームの動きを客観的に見ることができたり、地域との関わりの中での責任をより明確に感じ取ったりすることができたと述べており¹、上級段階科目で得た学びを一層深められているようである。

6-3. まとめ

今年度の「地域リーダー実践 (上級) I、II」については、まず受講生が倍増したために 4 チームが並走したというのが最大の特徴である。これによって足並みを揃えることの難しさが今回浮き彫りになった。これまで 2 年間は 2 チーム (主担当教員 2 人) で実施してきたが、担当教員同士の情報交換や学生同士のつながりも十分に密であり、大きな不公平感を抱かせることなく運営できていたと考えている。それが 4 チーム (主担当教員 5 人) になったことで横のつながりにバラつきが出たのは当然といえば当然である。

それを補う措置としての教員ミーティングであったが、月 1 回の開催を目指しつつも 5 月～翌年 2 月までの 10 か月間で 6 回の開催に留まった。学生のミーティング場所を統一することで、教員ミーティングに頼らない有機的な情報共有も目指したが、やはり主担当でないチームへの関わり方は加減が難しく、むしろ学生同士のつながりに助けられた部分が大きかった。取り組み内容が違うので進捗状況に差が生じるのもやむを得ないのだが、統一して何を重視するのかを、改めて確認、共有することが必要であろう。

一方で、学生たちはそれぞれの与えられた状況の中で真摯に取り組み、様々な成長を見せてくれた。学部や学年を超えたチームで、自分たちで目的を設定して行動するという取り組みが、一過性ではない彼らの成長の糧となるよう、今後も工夫して取り組んでいきたい。

¹ この SA は全員が「ぎふ次世代地域リーダー」の称号を申請しており、その際に課される「ぎふ次世代地域リーダー」に関するレポートの中で自分自身の学びについて叙述している。

7. 謝辞

「地域リーダー実践（上級）Ⅰ、Ⅱ」は、学生を受け入れてくださる地域があつてこそその科目です。今回も大学生の取組みということで、期待と忍耐をもって様々な方にご協力をいただきました。この場にお名前を上げさせていただき、改めて御礼申し上げます。

【関チーム】

岐阜信用金庫、NPO 法人 ORGAN、株式会社ミュウの堀博瑛社長、利隆刃物製造の玉田隆文代表をはじめとした関係者の皆様

【中津川チーム】

中津川市市民協働課中尾まゆみ様、阿木事務所所長林行典様、阿木事務所の皆様、インタビュー調査等の学生活動にご協力頂いた阿木地区の皆様、canpai design 佐藤健太様

【土岐チーム】

高山城高山宿史跡保存会 後藤清様、安藤学様、土岐市役所 熊崎直美様、加藤正弘様、岐阜県立土岐商業高等学校、ときつこども園、土岐津小学校附属幼稚園、土岐津公民館、土岐津児童館の皆様、土岐チームの質問紙調査やイベント等の活動にご支援とご協力をいただいた皆様

【郡上チーム】

地域おこし協力隊 吉田雄輔様、母袋わくわく会会長 古清水満様、インタビューにご協力頂いた母袋地区 UI ターン者の皆さま、あたたかく受け入れてくださった母袋地区の皆さま

本当に多くの方にお世話になりました。誠にありがとうございました。

関チーム成果物

イベントチラシ

関七百有余年の伝承 刀匠の技術を受け継ぐ職人の 匠の技に感動する休日

岐阜大学  × 岐阜信用金庫 × 長良川おんぱくコラボ企画



11/3特別公開

おみやげ付き！ 鉄、包丁の研ぎ体験 & 工場見学

- 日時:11/3(金・祝)
 - ①【午前の部】10:00~13:15 (集合 9:55)
 - ②【午後の部】14:15~17:30 (集合 14:10)
- 会場:株式会社ミュウ本社(地図裏面記載)
(住所:岐阜県関市中3丁目38番の3)
- 参加費:3,500円【10歳以下 2,500円(包丁研ぎ体験ができないため)】
- 持ち物:参加費、手拭きタオル、包丁(注1)
注1 普段お使いになっている包丁をお持ちください。

当日の案内人(岐阜大生)からのオススメポイント3つ

- 1** 【職人の技術】世界の美容師が御用達！？ディスカバージャパン掲載の凄腕職人！
関で700年余かけて培われ、受け継がれてきた刀匠の技。その技術を用いて作られた刃物は、海を越え、フランスからも職人が足を運ぶほど注目されています。
- 2** 【おみやげ】包丁の切れ味が復活 & ダマスカスオリジナルペーパーナイフ
「うちの包丁全然切れない。」そんな包丁も、プロの技で切れ味復活！切れすぎにはご注意ください。理美容鉄の工場見学では、今回の企画のために材料だけで既に予算超えのダマスカス鋼材を使った、オリジナルペーパーナイフをプレゼント！
- 3** 【案内人】当日は岐阜大学の地域リーダー育成プログラムの学生がご案内
「刃物について詳しくなくても大丈夫？」僕たちも半年間かけて、そういう初めての人にも楽しんでいただけるように、準備してきました！当日は、参加者のみなさんの充実した刃物ライフをサポートします！

当日の内容・詳細は裏面へ

詳細は「長良川おんぱく」URL:<https://goo.gl/GM7zxc>から申し込み

お問合せ Mail: sekiteam139@gmail.com

企画: 岐阜大学次世代地域リーダー育成プログラム「地域リーダー実践(上級)」受講生関チーム





This factory tour
is only on 2017/11/3/.

当日の概要

	所要時間	内容
鉄工場見学	約40分	1枚の鉄板から10万円以上する高級理美容鉋ができる過程を、実際の機械と職人の技でお見せします。
包丁工場見学	約60分	ご自身の包丁が職人の技で修理されていく過程を直接ご覧になれます。
お土産作り	約30分	お土産には、鉄素材の中でも最高級素材のダマスカス鋼材を用いたペーパーナイフを用意しました。ペーパーナイフの仕上げ磨き、及び名前の刻印を体験できます。
包丁研ぎ体験	約50分	包丁研ぎには荒研ぎ、中研ぎ、仕上げ研ぎの三段階があります。今回は最後の二段階の中研ぎと仕上げ研ぎを職人が直接教え、体験することができます。
切れ味体験	約10分	鉋では、実際に完成した製品でマネキンの髪の毛の試し切りができます。包丁では、一流の料理人が使う製品を複数用いて切れ味の違いを体験できます。
バーベキュー (自由参加)	約40分	プログラム参加者の他に、今回のプログラムの案内人である、岐阜大学の学生5人と今回のプログラムを実施した企業のメンバーも参加します。

案内人・工場見学実施企業のご紹介

【岐阜大学次世代地域リーダー育成プログラム受講生】

地域リーダー実践(上級)という講義の個性豊かな学生5人。私たちは鉋・包丁などの刃物を通して新たな出会いの場を創出します。



岐阜県関市中3丁目38番の3の周辺地図

【株式会社ミュウ】

「ハサミは、理容師・美容師の技術を助ける為の大切な道具である」

株式会社ミュウはこの信念の下、プロの求める切れ味を叶える、10万円以上もする高級な鉋を製造しています。日本の文化を紹介する雑誌「ディスカバー・ジャパン」に掲載されたこともあります。

また日本だけではなく海外からの需要もあり、韓国やフランスからもバイヤーが鉋を買い求めに来るほどです。今回は、世界から認められた理美容鉋の世界にご案内します。

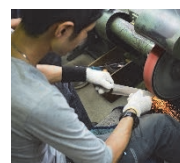


【利隆・刃物製造】

「包丁一筋」

利隆・刃物製造はプロの料理人、食肉加工職人が使用する牛刀と呼ばれる種類の包丁を製造しています。プロが牛刀に求める条件は切れ味と丈夫さの両立です。利隆・刃物製造では、開業以来四半世紀にわたってプロの要求に応える牛刀を造り続けてきました。

今回は、日常生活で用いることのない鋭い切れ味の刃物を体験できる機会をご提供します。



詳細は「長良川おんぱく」 URL:<https://goo.gl/GM7zxc>から申し込み
お問合せ Mail: sekiteam139@gmail.com

企画：岐阜大学次世代地域リーダー育成プログラム「地域リーダー実践(上級)」受講生関チーム

中津川チーム成果物

パンフレット

あぎ 阿木で子育てしませんか

岐阜県中津川市阿木地区
移住促進パンフレット

あぎ 阿木とは？

阿木地区は岐阜県の東濃にある中津川市の南に位置します。川が流れ、棚田が広がる豊かな場所で、のびのびと子育てをすることができま



【阿木地区の概要】

面積：78.21km²
人口：2,277人
世帯数：823世帯
気候：夏は涼しく、冬の冷え込みが厳しい
(平成29年度4月1日現在)

阿木地区



阿木では、そばとシクラメンの栽培が盛んに行われています。また、長楽寺には県の天然記念物に登録されている樹齢一〇〇年の大イチョウの木があります。さらに、伝統芸能としての安岐太鼓が有名です。これらの特徴を活かしたイベントやお祭りが行われています。

このパンフレットは、岐阜大学の学生が、阿木への移住促進のために制作しました。阿木について知っていただくきっかけとなれば幸いです。

岐阜大学
地域リーダー実践上級
阿木グループ

古田幹樹 小 椋健司
関口真帆 大 富拓健司
加藤大暉 渡 邊由香里



あぎの里の ひなまつり

二月下旬から三月上旬にかけて大正雛、土雛などと共に合わせて約二五〇点のつるし雛を展示します。皆さんの雛に囲まれた会場は壮観です。

大正雛(たいしょうひな)：大正時代の特徴を持つひな人形。
土雛(つちひな)：粘土製のひな人形。



春

阿木夏祭り

八月に来場者数一〇〇〇人以上の花火大会が行われます。尺玉、スタターメインを含む三五〇発もの花火が夜空を鮮やかに彩ります。そして、安岐太鼓の演奏がさらにお祭りを盛り上げてください。そのほかにも、バスケット大会や子供みこし、あんどん盆踊りなど催し物が目押しします。



夏

大いちょう祭り

十一月上旬になると、岐阜県の天然紅葉が指定されている大イチョウの街の長巻まで安岐太鼓の演奏や催し物が開かれ多くの人でにぎわいます。夜には大イチョウアップも行われます。幻想的なイチョウの木を是非ご覧になってください。



秋

シクラメン祭り

十一月下旬に阿木産シクラメンの即売会を実施しています。毎年多くの人がシクラメンを買い求めに來られます。地元の人や、実際にそばを打つそばイベントや、そばの即売会が開催されます。阿木のそばは人気のため午前中には完売します。



冬

学校どうしのつながりを活かした進学サポート

一人ひとりにきちんと向き合う少人数教育

阿木保育園



アレルギーがあっても安心。

- ・3～5歳児が対象です。
- ・定員は60名です。
- ・1歳からの未満児保育も対応します。
- ・延長保育もできます。
- ・給食は園内で作っています。
- ・保小連携協議会が設置され小1プログラム¹への対応に取組んでいます。

阿木小学校



思いやりの心を育てます。

- ・1クラス平均は約14人です。
- ・ひびきあい集会を開いて思いやりの心を考えます。
- ・かかやきカードで自分の学習を管理します。
- ・阿木の方から阿木の歴史を親子で学ぶ、三世交代型のお宝探検ウォークがあります。
- ・小中連携推進委員会が設置され中1ギャップ解消²に向けた取り組みをしています。

阿木中学校



きめ細かい指導と学び合い。

- ・1クラス平均は約19人です。
- ・1つの授業で2人の先生が協力して指導を行うチームティーチングをしています。
- ・学び合いの時間をつくり生徒同士で学力を伸ばします。
- ・「絆プラン³」により読書の質を高めます。

阿木高等学校



一人ひとりが主人公。

- ・県内唯一の単位制昼間定時制高校です。
- ・農業生産を学習する生産科と幅広く知識を学ぶ総合生活科があります。
- ・各学科で様々な資格が取得できます。
- ・各学科の定員は40名です。
- ・学校設定科目「キャリアデザイン」により、社会人として必要な知識や技術を得ることが出来ます。

1. 小1プログラム：小学校に入學したばかりの1年生が学校生活になじめない状態が続くこと。
2. 中1ギャップ：中学校に進学した際、不登校やいじめの増加などの問題が生じる現象のこと。
3. 絆プラン：読書の習慣をつけることで想像力を育み、親子の絆を深める計画のこと。

私の移住ストーリー



学生 阿木に住んだきっかけを教えてください。

Kさん 主人が林業をやりたいと移住しました。半年間、住む場所を探して、たまたま良い空き家があったのが阿木地区でした。いろいろな場所を探しましたが貸して頂ける場所になかなか巡り合えず住居地探しは大変でした。

学生 阿木に移住してからどのような苦勞がありましたか？

Kさん 空き家をそのまま安く譲っていただいたので、修理が大変でしたね。デッキ、勝手口など色々直しました。

岐阜市出身 40代女性Kさん
社内結婚後、阿木に移住
旦那様、小学生のお子さん
Kさんの3人暮らし
趣味：描画とガーデニング

学生 阿木地区に溶け込むきっかけは何でしたか？

Kさん わくわく広場（育児サークル）の方が自宅に来て誘って頂いたのがきっかけでした。

学生 阿木に住んでみてよかったなど感じることはありますか？

Kさん 景色がいい事、空気がいい事、自然が豊かな事ですね。もともと父の実家が飛騨の山奥で田舎には親しみがありません。

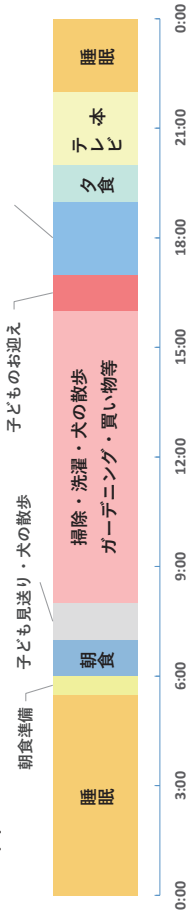
学生 旦那様は阿木への移住に対してどう感じていますか？

Kさん 多分満足していると思います。もともと薪ストーブのある家にあこがれて移住してきて、そのために森林組合に入たくらいなので。

学生 今後の暮らしの計画を教えてください。

Kさん 持ち家なのでこれからも住み続けます。子供は高校に行くとその後は自由に決めて欲しいです。

一日のスケジュール



阿木のみんなが子どもを見守る

ママとつながる 育児サークル



わくわく広場

0~3歳の子どもを持つ親子が集い、イベントの企画・運営を行っています。保育士さんや栄養士さんに相談することもできます。保育園に入る前から子供同士、親同士の繋がりを持つことができます。

活動日：毎週火・木曜日 午前10:30~12:00
約20組の親子が参加しています。

入園前から 保育園へ



ポチトマト

0~3歳の子どもを持つ親子を対象に行われる数か月に一度のイベントです。保育園児と一緒に遊んだり、運動会を見に行ったりすることで、入園前から保育園の様子を知ることがができます。

ママたちの 育児サポート



ぽけっと

託児や市の健診の予約を代理で行う子育て支援団体です。託児は、1対1の託児と団体の託児があります。お子さんの地域の先輩ママたちが見てくれます。

お兄さん・お姉さんと いっしょに遊ぼう



知恵のWAWAクラブ

小学生を対象に行っている夏休みと春休みの期間限定の学童保育です。地域の方々や中高生・大学生が子どもたちと一緒に遊んだり勉強をしたりしてくれます。

開催期間：夏休みと春休みの年2回。
約20人の子どもが参加しています。

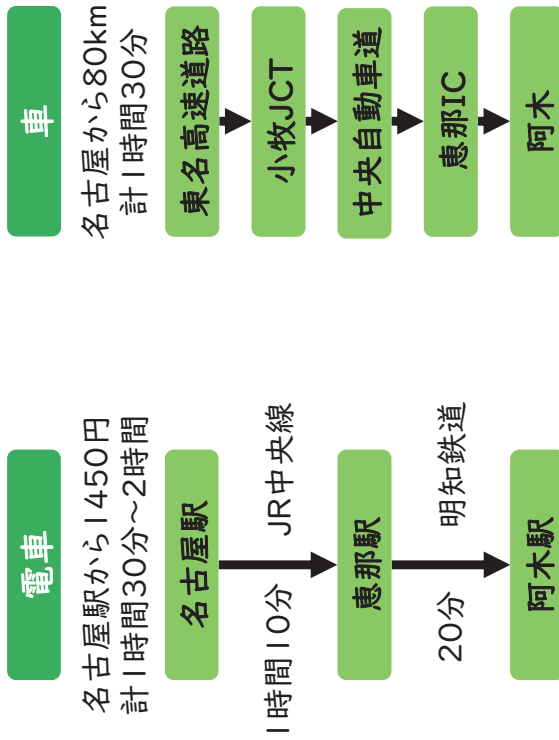
放課後の 子どもの居場所



みちくさ図書館

阿木公民館では『みちくさ図書館』を放課後の子どもの居場所として開放しています。小学生が宿題や読書しながら、お迎えを待ちます。月曜日と水曜日にはボランティアによる読み聞かせや折り紙教室が開催されています。

《アクセスのしかた》



《移住のための情報サイト》

総合移住相談

阿木事務所
〒509-7321
中津川市阿木33番地
TEL:0573-63-2001



移住体験施設

阿ん木のうち
NPO法人
田舎暮らし応援ネットぎふ
中津川市阿木1171
TEL:0573-68-8211



中津川市 空き家情報バンク

「中津川に住もう!」
中津川市定住推進課



UTターナー者用住宅の情報アリ!
「新婚さんいらっしゃい!事業」
など移住支援事業も行っています。

Q&A

Q1 車は必要?

A1 あると便利です。
コミュニティバスや明知鉄道などの公共交通機関はありますが、本数は少ないです。



Q2 スローライフは楽?

A2 田舎暮らしは都会暮らしと比べるとのんびりしている部分もありますが忙しい部分もあります。それをどう楽しむかが重要です。「収入は1/2でも幸せ2倍!」となればいいのです。

Q3 働くところはある?

A3 阿木に住む多くの人は恵那市や中津川市に車で通勤しています。電車で名古屋に通勤する方もいます。今後は、リニア中央新幹線の開業で新たな雇用が期待できます。

Q4 買い物はどうする?

A4 平日は阿木のスーパーを利用して、休日は高速道路などを利用して、大型ショッピングモールで衣服、家具や日用品を揃えています。



Q5 冬は雪が多い?

A5 多いです。
冬の寒さが厳しいため、暖房器具は一部屋に一台必要です。



Q6 地域に溶け込むには?

A6 住民の方も、どんな人がくるのか期待と不安を感じているので、まずは挨拶が大切だと思います。色々な地域行事に参加することで顔も覚えてもらいやすいです。

Q7 病院はあるの?

A7 診療所が1つがあります。
定期健診や高度な検査の場合は、恵那市や中津川市まで行く必要があります。

Q8 ネット環境はある?

A8 光ファイバー網が整備されています。インターネットを利用したお仕事も可能です。



Q9 農業はできる?

A9 高齢になった方が田畑の管理をお願いするケースが増えており、農業を始めやすい環境です。
「新婚さんいらっしゃい!事業」農作業をするなら、マニュアル免許と軽トラの所有がおすすです。

〜ちよつと小話〜 阿木に一つしかない信号機



実はこれ、道路交通の安全のために設置されたのではありません。子どもたちが社会の交通ルールを学ぶために設置されたのです。

土岐チーム成果物

アンケート結果報告

土岐高山チームアンケート結果報告

(2018年2月13日)

【一般用アンケート】

回収場所：高山城戦国合戦まつり
回答日：2017年10月15日
回収枚数：41枚

【高校生用アンケート】

回収場所：岐阜県立土岐商業高等学校
回答時期：2017年11月
回収枚数：145枚

【子育て世代用アンケート】

回収場所：土岐津小学校附属幼稚園・ときつこども園
回答時期：2017年11月
回収枚数：71枚

【チームメンバー】

吉田 博也 (地域科学部)
原口 佳也 (工学部 社会基盤)
伊藤 大貴 (地域科学部)
小木曾 香純 (地域科学部)
横田 晶子 (応用生物科学部 応用生命科学)
弓部 倫美 (地域科学部)

【担当教員】

後藤 誠一 (岐阜大学 地域協学センター 助教)

【一般用アンケート結果】

1.自由記述要約

①土岐市の良いところ

- ・公園も沢山あり、災害が比較的に少なく、土岐アウトレット、名古屋へのアクセスがよい
- ・自然が豊かで、穴弘法の紅葉祭も行われており、ゴミがあまり落ちていない
- ・陶磁器生産日本一というネーム/リユームは自分の故郷を語る上で誇り
- ・田舎でもなく、都会でもないことから、中途半端でまだ伸びしろがある
- ・泉質の良い温泉があり、山、川が美しく、町ごとに魅力がある

②土岐市の不便なところ

- ・他の町のように取り入れて交流するのが苦手であり、東美津一体としての活動ができないこと
- ・駅前商店街が貧弱なので活性化し、映画館などレジャー施設や店が増えてほしい
- ・道が狭い所が多く、夜街灯の少ない箇所もあり、交通安全や治安上不安がある
- ・1人1人の地域の行事に参加する意識が薄いことが問題
- ・バスや電車の本数が少なく交通不便

③土岐市の魅力

- ・山の色、川の音、昔ながらの煙突のある風景、古墳、人の素朴さなど、なんとなく居心地が良いところ
- ・名古屋へのアクセスが良く、アウトレット、イオンモール、東海環状道など、都市化が進んでいるところ
- ・都会でも田舎でもなく、安全で自然豊か、地域の方は人情に厚く住みやすいところ
- ・それぞれの地区の精力的な取り組みにより、様々なイベントが開催されているところ
- ・歴史と近未来が融合するポテンシャルを秘めた市であるところ

④土岐市への要望・意見

- ・市外の知人に自信を持ってオススメできる、土岐市といえばこれ！と言える特産品（食べ物）がほしい
- ・高山合戦祭りと同時開催のイベントを行うことでさらなる高山合戦祭りの盛り上がりが増えれば良い
- ・山の中のアスレチックや、オートキャンプ場など、子育てでも利用できる施設、店が増えてほしい
- ・アウトレットを活かしてナガマリソニーのような広域商業施設を集積したらよいのではないかと
- ・ランチする場所が少ないため、色々な店などの情報があると嬉しい

⑤土岐市の子育てしやすい点

- ・児童館が沢山あり、小学校・中学校も近く、自然も多くことから子どもを育てる環境としては良い
- ・4月入園なら待機児童がなく、保育園が充実している
- ・陶史の森のような自然いっぱい場所がある
- ・保険（乳幼児）制度が行き届いており、三世代世帯が多く助け合えるところ

⑥土岐市の子育てにくい点

- ・子どもを雨の日に遊ばせる場所が少ない、公園以外に子どもが遊べる場所が少ない
- ・子どもの夜間救急のある病院が市内になく、病児保育が市内にない
- ・子どもを連れて行ける外食場所が少ない
- ・保険に関するお知らせが分かりにくい

⑦若者に期待すること

- ・土岐市には大学もないし仕事がないので、市外で日本背負って働き、年とたらまた戻ってきてほしい
- ・土岐市に愛着を持ち続け、市外で得た経験を土岐市に持ち帰って活かしてもらいたい
- ・土岐についてもっと長く知り、地域で活動してほしい
- ・今まで受け継がれてきた祭りを引き継いでほしい
- ・地元で就職してほしい

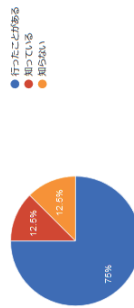
⑧都市圏へ出て行った若者に期待すること

- ・名古屋周辺であれば、土岐市から通うことも可能なので、戻ってきてほしい
- ・都会の暮らしを経験した上で土岐市の良さを引き出す提案がほしい
- ・いつかほんの少しでも自分の経験を育った場所で活かしてほしい
- ・自分の持ち場で頑張る、都市圏で土岐市のことを広めてほしい
- ・土岐市のPRを積極的にしてほしい
- ・老後(60歳)には戻って欲しい

2.選択肢によるアンケート結果におけるグラフ

(問1) 土岐高山城跡の森

46件の回答



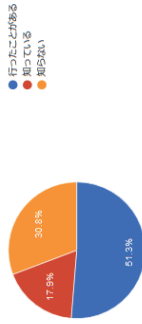
(問1) 高山城跡物見櫓

39件の回答



(問1) センターハウス

39件の回答



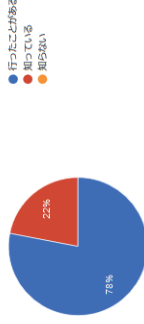
(問1) 弘法まみじのライトアップ

39件の回答



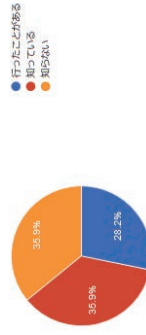
(問1) 高山城戦国合戦まつり

41件の回答



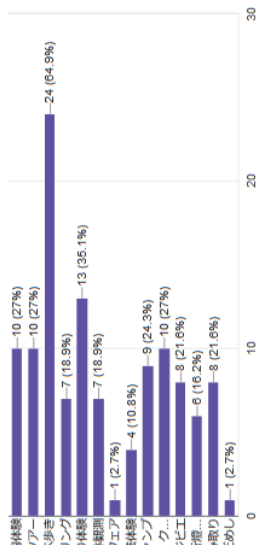
(問1) 里山わいわい広場

39件の回答



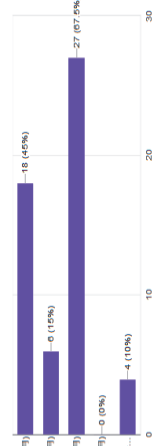
(問 2) 土岐市高山地区でイベントが開催されるとしたら、参加したいもの

37件の回答



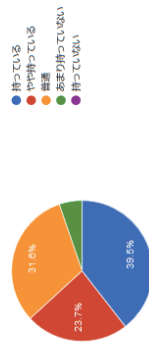
(問 3) 土岐市高山地区でイベントが開催されるとしたら、いつ頃が良いか

40件の回答



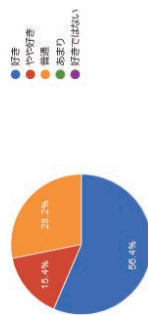
(問 7) 土岐市に誇りを持っているか

38件の回答



(問 8) 土岐市が好きか

39件の回答

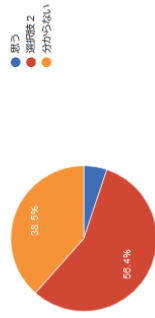


4

(問 9) 将来土岐市または自分の住んでいる街から離れたらいいか

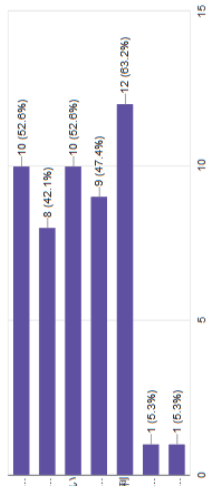
※選択肢訂正：● 選択肢 2 → ● 思わない

39件の回答



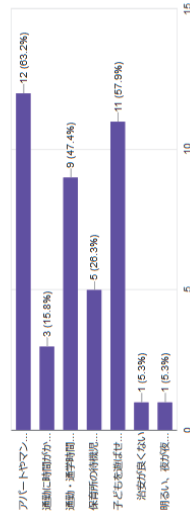
(問 10) 都市のメリットはなにか

19件の回答



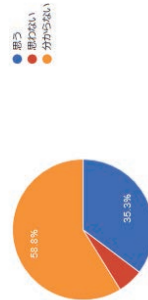
(問 11) 都会の暮らしのデメリットはなにか

19件の回答



(問 12) 将来土岐市または自分の住んでいる街から離れると仮定して、いつか土岐市または自分が住んでいる街に戻ってきたいと思うか

17件の回答



5

- ・美濃焼や伝統的なものや食べ物など
- ・都会すぎず田舎すぎない

④ 土岐市への要望・意見

- ・「空き家から始まる商店街の賑わい 創出プロジェクト nanoda」に何かイベントを開催するのほどだろうか
- ・森が多いことを活かしてアスレチックなど大人も子供も楽しめるような大きい施設を作ってほしい
- ・学生団体で行ける飲食店や映画館、ゲームセンターなどを増やしてほしい
- ・駅付近をもっと活性化していきたいに整備して欲しい

⑤ 子供の頃に参加して、「楽しかった、もう1度やってみたい」と思う、地域活動・行事・イベント

- ・もの作り系のイベント（木工細工、粘土工作、ビーズの手芸体験、サイエンス体験、作園体験、など）
- ・地域で催される季節のイベント（餅つき、花火大会、やぶさめ芋掘り大会、スタンブラーなど）
- ・七夕まつり、秋祭り、夏祭り、公民館祭り、おみこし

⑥ よく遊びに行く場所

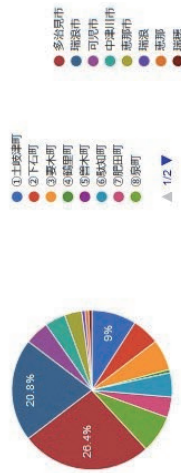
- ・弓道場、ジム、バドミントンセンター、ウエイドフテイング場、テニスコート、プールなどスポーツ施設
- ・mozo ワンダーシティ、土岐アウトレットモール、ルビントタウン
- ・SEGA、自由空間（ネットカフェ）といった娯楽施設

2. 選択肢によるアンケート結果におけるグラフ

1. ご自身について

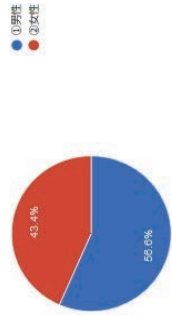
(問 1) お住まい

144 件の回答



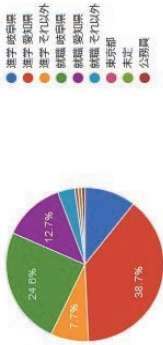
(問 2) 性別

145 件の回答



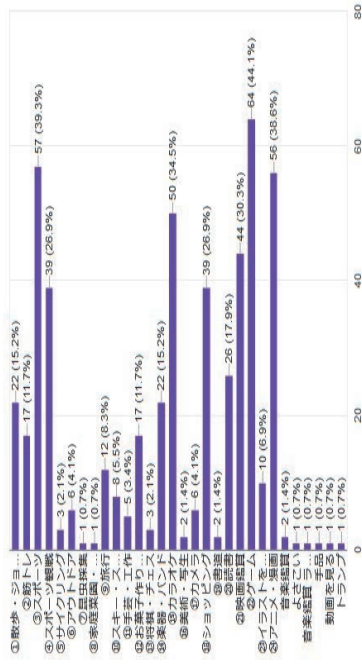
(問 3) 進路

142 件の回答



問 7) 趣味

145 件の回答

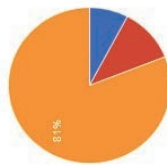


2. 土岐市高山地区について

(問 1) 土岐高山城跡の森

142 件の回答

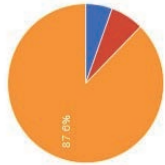
● ①行ったことがある
● ②知っている
● ③知らない



(問 1) 高山城跡物見橋

145 件の回答

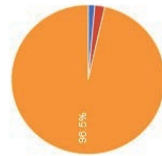
● ①行ったことがある
● ②知っている
● ③知らない



(問 1) センターハウス

143 件の回答

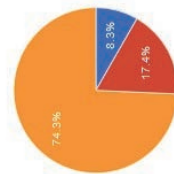
● ①行ったことがある
● ②知っている
● ③知らない



(問 1) パ弘法もみしのライトアップ

144 件の回答

● ①行ったことがある
● ②知っている
● ③知らない

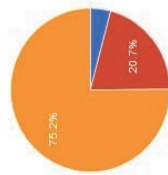


10

(問 1) 高山城戦国合戦まつり

145 件の回答

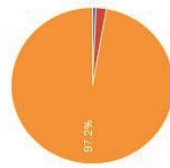
● ①行ったことがある
● ②知っている
● ③知らない



(問 1) 里山わいわい広場

144 件の回答

● ①行ったことがある
● ②知っている
● ③知らない



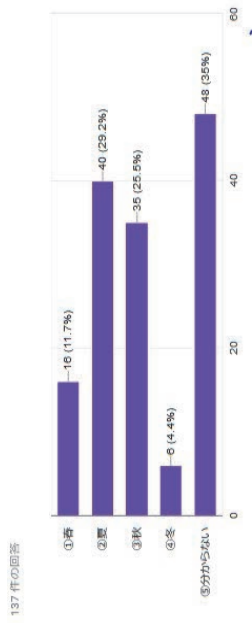
(問 2) 土岐市高山地区でイベントが開催されるとしたら、参加したいもの

139 件の回答

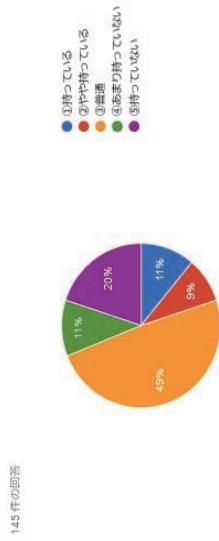


11

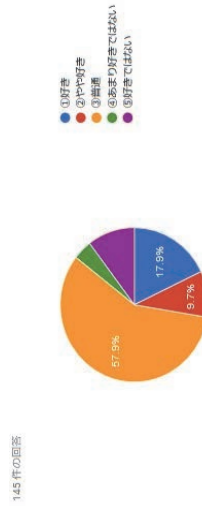
(問 3) 土岐市高山地区でイベントが開催されるとしたら、いつ頃が良いか



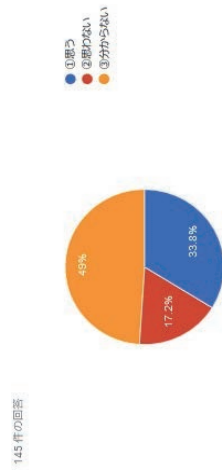
(問 7)土岐市に誇りを持っているか



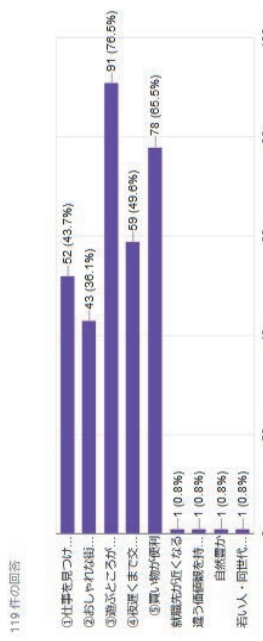
(問 8) 土岐市が好きか



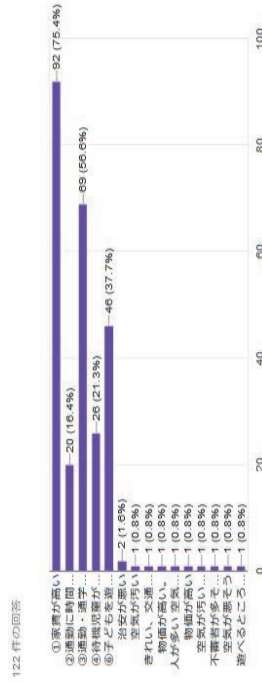
(問 9) 将来土岐市または自分の住んでいる街から離れたいか



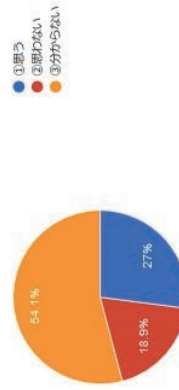
(問 9-a) 都市のメリットはなにか



(問 9-b) 都会の暮らしのデメリットはなにか

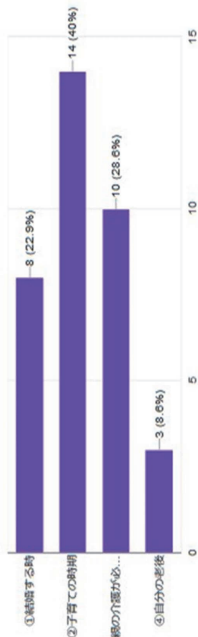


(問 9-c) 将来土岐市または自分の住んでいる街から離れると仮定して、いつか土岐市または自分が住んでいる街に戻ってきたいと思うか



(問 9-d) (問 9-c) で「思う」を選んだ方はいつ頃戻ってきたか

35 件の回答



【子育て世代用アンケート結果】

1.自由記述要約

① 土岐市の良いところ

- ・保育園に入りやすく、他と比べると保育料なども安く、子どもにかかるお金が少ない
- ・都会ほど窮屈ではなく、文化的でゆったりしている
- ・渋滞が少ない上、交通の便が良い点も
- ・自然の豊かさ

② 土岐市の不便なところ

- ・公園の遊具が古く危険であり、子供を遊ばせるには遠い公園まで行かなければならない
- ・駅前が賑わっており、バス、電車の本数が少ない、特にバスは停留所が少ない
- ・飲食店を含め、商業施設が少なく、深夜まで営業していない
- ・会員でないと出来ないシステムが不満
- ・小児科、産婦人科医が少ない

③ 土岐市の魅力

- ・陶器と自然が調和しており、ホタルや紅葉などを楽しみ、絵付けや作陶体験の機会があること
- ・「美濃焼き」という焼き物という伝統的な文化がある
- ・アウトレット、イオンモールなどの出店
- ・各方面へのアクセスに優れている

④ 土岐市への要望・意見

- ・オープンな文化ホール、ふらっといきたくする図書館、芝生の公園など全年齢の人が憩える場がほしい
- ・美濃焼ミュージアムの併設などを通して、「美濃焼」のブランド化 PR を行えば良いのでははないか

14

- ・文化プラザの催し物について、著名人の講演会、アーティストのライブなどの催し物が沢山あればいい
- ・小児科、産婦人科など病院施設の充実化

⑤ 土岐市の子育てしやすい点

- ・ときどきも園は頻りになり、幼稚園の服が共通で、ほどほどに行事があることから、親子で楽しめる
- ・地元の行事（お祭り、町民運動会など）があり、町民がめだたかい
- ・幼稚園の料金が安く、小学校の放課後教室も値段が良心的
- ・病院が割と多く、医療費免除が中学 3 年生まで受けられる

⑥ 土岐市の子育てにくい点

- ・愛知県児童福祉センターのような、スペースの広い、雨の日などに子どもが室内で遊べる場所がない
- ・子どもの予防接種の問診をわたされただけでは注射を接種するタイミングが分かりづらい
- ・保育園や幼稚園に行くまでの 0 歳～2 歳くらいまでの子どもが遊ぶ場所がない
- ・保育園の年長になったら幼稚園に行くシステムがわかりにくかった
- ・育児サークルや施設、設備などが不十分

⑦ 土岐市に住んでいる若者に期待すること

- ・学生時代に、あんな事をしたな、こんな事をしたな、と思える思い出を地元で作ってほしい
- ・行事を年配の人たちが中心にやっているため、後継者をもっと育てないといけない
- ・地域のイベントへ参加して小さい子供やお年寄りも積極的に関わりを持ってほしい
- ・一度外へ出て、広い視野と知識を身につけた後、地元に戻ってきてほしい
- ・結婚したらまた地元に戻ってきて子育てしてほしい

⑧ 都市圏へ出て行った若者に期待すること

- ・土岐は自然豊かで良いところだと思うので、土岐市の良さを周りに伝えて欲しい
- ・土岐市出身をアピールしたりするなど、土岐市のために頑張ってもらいたい
- ・お年寄りだけで住んでいる家が多いため近くに住んでほしい
- ・美濃焼を世に広めて欲しい

⑨ 子供の頃に参加して、「楽しかった、もう 1 度やってみたい」と思う、地域活動・行事・イベント

- ・自治会や子供会などで企画されたキャンプ、プール、お泊まり会、肝試し、星空観望、そとめん流し
- ・地域全体で行う、夏祭りや、やぶさめ、おみこし、盆踊り、町民運動会、陶器祭り、もちつき、お菓子つき
- ・化石ほり、かぶとむし観望会、ウォークラリー、冬には、リース作りやクリスマス会、スケート、スキー教室
- ・カキキング体験、竹馬や竹とんぼ、インテリアや木工細工などの作り体験

⑩ よく遊びに行く場所

- ・東山動物園、ナガサマスパラウンド、ハイウェイオアシス、サイエンスワールド、などのレジャー施設

15

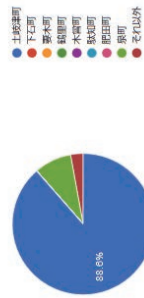
- ・陶史の森、恐竜公園、高山公園、えのき公園、浅野緑地、愛・地球博記念公園などの公園
- ・イオンモール、アウトレット、コストコ、寄り道温泉、セラトピア土岐、南宮神社、児童館

2. 選択肢によるアンケート結果におけるグラフ

1. ご自身について

(問1) お住まい

70件の回答



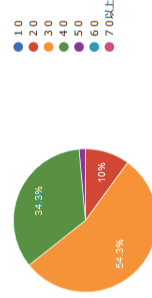
(問2) 性別

70件の回答



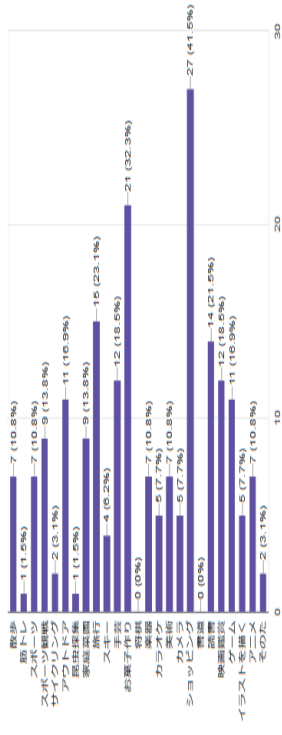
(問3) 年齢

70件の回答



(問6) 趣味

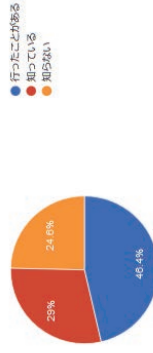
65件の回答



2. 土岐市高山地区について

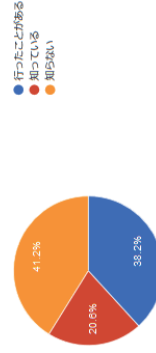
(問1) 土岐高山城跡の森

69件の回答



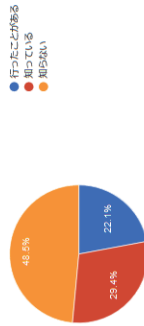
(問1) 高山城跡物見櫓

68件の回答



(問 1) センターハウス

68 件の回答



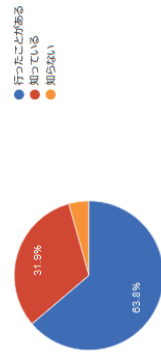
(問 1) 穴弘法もみじのライトアップ

69 件の回答



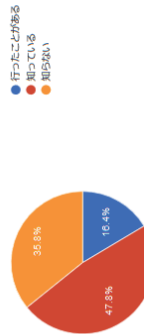
(問 1) 高山城戦国合戦まつり

69 件の回答



(問 1) 里山わいわい広場

67 件の回答

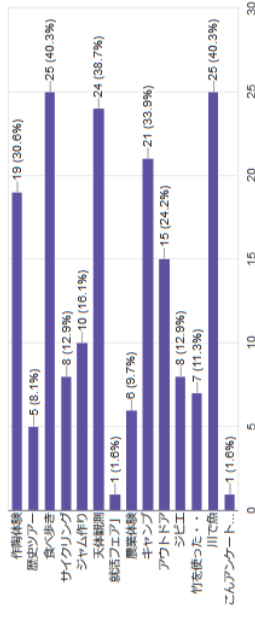


(問 2) 土岐市高山地区でイベントが開催されるとしたら、参加したいもの

18

※選択肢修正：『こんあんケート』⇒『竹』にとも興味があるので、竹のイベントに
参加したい』

62 件の回答



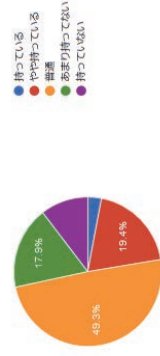
(問 3) 土岐市高山地区でイベントが開催されるとしたら、どの頃が良いか

67 件の回答



(問 7) 土岐市に誇りを持っているか

67 件の回答



19

(問 8) 土岐市の方が好きか

※ (修正) → ●あまり好きではない

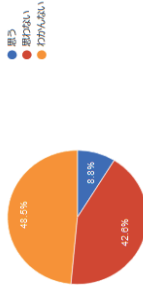
69 件の回答



(問 9) 将来土岐市または自分の住んでいる街から離れたいか

※ (修正) → ●分らない

68 件の回答

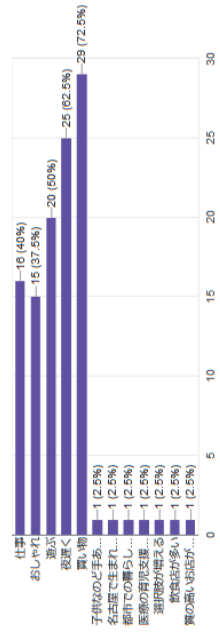


(問 9-a) 都市のメリットはなにか

※ (上から 6 行目より)

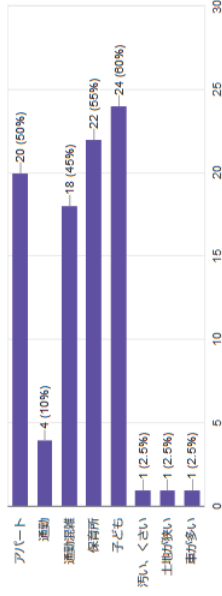
子育て世代にとって住民税の控除など手厚い
 名古屋で生まれ育ったので、土岐が不便すぎる
 医療分野における、育児支援の選択が豊富
 飲食店が多い
 質の高い店が多い

40 件の回答



(問 9-b) 都会の暮らしのデメリットはなにか

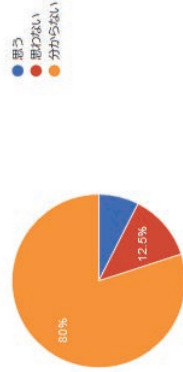
40 件の回答



(問 9-c) 将来土岐市または自分の住んでいる街から離れると仮定していつか

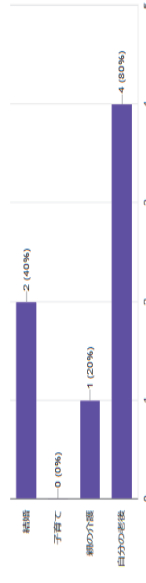
土岐市または自分が住んでいる街に戻ってきてほしいと思うか

40 件の回答



(問 9-d) (問 9-c) で『思う』を選んだ方はいつ頃戻ってきたいか

9 件の回答



郡上チーム成果物

U,I ターン者インタビュー報告書

【夢ビジョン資料】

U,I ターン者

インタビュー報告書

平成 29 年度 岐阜大学 全学共通教育科目
「地域リーダー実践（上級）」郡上（母袋）チーム
応用生物科学部 3 年 上兼栗 ふく
教育学部 3 年 川合 菖太
教育学部 3 年 杉岡 真衣
教育学部 3 年 田中 沙季
地域科学部 2 年 花木 将至
地域科学部 2 年 矢口 友崇
担当教員：地域協学センター助教 塚本 明日香

1. はじめに（杉岡）

(1) 背景

岐阜大学には、全学共通教育科目の『地域リーダー実践（上級）』という授業がある。これは、ある地域の課題解決に向けた取り組みを学生主体で進めていく授業である。私たちは、これを受講している学生であり、岐阜県の中心部にある郡上市母袋地域にお世話になった。

私たちはこれまでに、現地見学や話し合いを通して、母袋地域の課題や、その課題にどのように関わっていけるか考えてきた。週に1度、大学で集まって話し合いを行い、2回の現地調査を踏まえて、最終的に6日間にわたるインタビュー調査を行った。5月に行った第1回現地調査後の話し合いでは、地域の資源を洗い出し、課題などを話し合った。そして、イベントをたくさん行ったり、それを通して訪問者との接点を増やしたりしているが、それによって母袋地域をどのような方向へ導きたいのか、目的が分からない、という結論に至った。そこから、『母袋地域の将来ビジョンが不明瞭である』という課題を導き出した。

7月に行った第2回現地調査では、母袋わくわく会の方々へ話し合った内容や、私たちの考える母袋地域の課題を報告した。その際、母袋わくわく会の方々も、母袋地域の将来ビジョン『母袋わくわく夢ビジョン』の作成に向けて動き出していることを知り、私たちもこの取り組みの手助けとなる事ができないかと考えた。母袋地域では、『母袋地域の将来ビジョンが不明瞭である』という課題がある反面、たくさんイベントを開くことで知名度を上げ、人を呼び込み、移住者を増やそうと努力している。そこで、移住者を増やすという面で夢ビジョン作成の材料を提供できるよう、9月と10月に6日間にわたり、11世帯14人を対象としたインタビュー調査を行った。

(2) 目的

今回の調査の目的は、『一般的な移住の視点から考えた場合の、母袋地域の良さや課題点を明らかにすること』である。そのため、これまでに母袋地域に戻ってこられた方、移住してこられた方々にインタビュー調査を行い、移住された経緯や母袋地域の良さ、課題点を伺った。また、『一般的な移住の視点』を知るために、内閣府（2014）による『「東京在住者の今後の移住に関する意向調査」結果概要』や、亘理町まち・ひと・しごと創生総合戦略委員会（2015）『移住・交流・定住に関するアンケート調査結果』を参考にした。そして、インタビューした内容を、『一般的な移住の視点』から分析した結果をまとめ、ここに調査結果を報告する。

2. 先進事例（上兼栗）

地域活性に成功している地区を事例にとり、母袋と比較検証を行った。参照したのは、相川俊英『奇跡の村 地方は「人」で再生する』集英社 2015 第一章 奇跡の村「下條村」である。

(1) 長野県下條村の概要

人口 3963 人，高い出生率： 1.88 人(2013 年)

面積 37.66 平方キロメートル(うち約 70%山林、約 12%農地、3%宅地)

標高 332 メートルから 828 メートルに集落が点在

財政基盤：大きな企業や事業所はなく、自治体の財政力指数は 0.22 と極めて低い

自立した財政政策を進めており、2013 年度決算の経常収支比率は 65.1%

借金返済の重さを示す実質公債費比率はマイナス 5.4%で全国ベスト 3 位

(2) 下條村の取組み

(2) -1 挑戦から始まる意識改革

会社を経営していた伊藤喜平氏が村長に当選し挑戦が始まった。伊藤村長は「トップが全体の奉仕者としてしっかり目標を定め、明確な指示を出せば公務員は真剣に働き、能力もある」と考えた。公務員は目的意識が希薄、スピード感やコスト意識に欠けていることに目をつけ、役場職員に職場体験させ世の中の人々がどのように働いているか実感させた。一方で、職場体験をした職員からは、「研修があったからではなく村長が口うるさく言うので職員が変わった」と語った。住民からは「今までふんぞり返っていた職員が頑張り始めた」と驚きをもって受け止められた。そして、次第に住民の意識にも影響が見られ何でもかんでも行政任せ、といった風潮に変化がうまれた。

(2) -2 財政健全化の取組み

①資材支給事業

支給事業とは、村道や農道、水路の設備を住民自らが行き、村が資材を支給するという、行政がやるべきことと、住民が自らやるものを明確に区分した施策だ。

最初は反対や批判も多かったが、支給事業第一号の評判が村に広がり相次いで地区が活用するようになった。施工方法や計画はすべて地区住民が話し合い工事を進める。話し合いや工事は住民たちの交流の場となり、経費は村が公共事業でやる場合の 5 分の 1 から 6 分の 1 で収まった。これより、自分たちの地域の課題を、自分たちが額に汗して、自分たちで改善するという考えが広がり、住民の意識改革となった。また、行政コストの縮減につなげ浮いた分をより優先度の高い事業に振り分けた。

②補助事業の活用

公共施設であるハコモノの建設は、事前に施設建設の計画を立てておき、景気対策等で国

が良い条件の補助事業などを出して来たらそれに飛びつく、という方法をとった。国の補助事業は年度末ギリギリに急に提示されるものもあり、事前に計画を立てて置くことで申請を逃さない準備となった。

(2) -3 自分たちで選んだ移住者と国からの自立

健全堅実財政を確立した下條村が次に取り組んだのは人口増を目指す若者促進住宅の建設であった。下條村では村営住宅建設を村の単独事業で行い、あえて国の補助金を活用しない選択をした。理由として、公営住宅にすると入居者の所得制限や選定は抽選で行うこと、間取りの規定など様々な国の制約を受けることになるためである。

下條村がどうしても譲れなかったのは入居者選定だった。村独自の基準で入居者を選択することを重視し、国の補助金を活用しなかった。

独自の入所基準として

- ①子どもがいる、もしくはこれから結婚する若者
- ②祭り等の村の行事への参加や消防団への入団

この2つを設定し、下條村の規定に基づき選考委員会にて入居を決定した。国道に近く周辺には役場、小中学校、保育所、診療所、商店、コンビニなどがあり、マンション風の2LDK駐車場2台付3万5~6000円で公募した。入所基準より、応募をやめる人もいたが安さと暮らしやすさでほぼ満室状態が続いている。

若い入居者の間に子供が生まれるようになり、下條村は独自の子育て支援策をつくった。「子育てのしやすい村」として評判をあげ、近隣自治体からも移住者を増やしベッタウンとなった。

(3) この村から学べること

村長のワンマン的な行動から意識改革が進み、反対派も最終的には動くようになっていった。その背景には、自治体として村長らの活動がある一定期間内に具現化されていくことで住民全体の理解が広がったこと、さらに具現化した活動が次の活動に繋がっていることを住民が明確に理解できたことが考えられる。

母袋ではわくわく会を中心に様々な活動があるが、活動自体が成果とされてしまっている。活動が次のステップに繋がっていることと明確化することが住民の理解を深めることに繋がると考えられる。

また、下條村では、村という自治体で村長がリーダーとして進行や改革を積極的に行うことができた。母袋は、郡上市の中の1地区であるため自治体への働きかけの工夫があると考えられる。母袋の地域活性だけでは自治体は協力的でないだろう。郡上市の地域活性の先駆けとして引っ張っていく、手本となるくらいの勢いと姿勢をアピールし自治体と交渉することが重要であると考えられる。

3. 調査方法および調査結果（矢口）

(1) 調査の実施要綱

インタビュー調査については下記のように実施した。

I. タイトル：母袋地区の将来ビジョンに関する調査

II. 実施方法：個別面接方式

III. 場所：①大和上栗巣集会所 岐阜県郡上市大和町栗巣 1934-1

②(株)ネオナチュラル 母袋有機農場・栗巣の家

岐阜県郡上市大和町栗巣 1079

③古清水満邸 岐阜県郡上市大和町栗巣 1968

IV. 時期：9月18日（月・祝）、25日（月）、10月20日（金）～22日（日）、26日（木）

V. サンプルング方法：全数調査

VI. 対象属性・人数など：母袋地区の全38世帯の内、世帯主が移住者・Uターン者である12世帯に協力を求め、インタビュー日時を調整することができた11世帯14人（内Uターン6人、Iターン8人）を対象とした

(2) 調査後の作業について

インタビューの内容について各担当者がそれぞれの大筋をメモにまとめ、「母袋に移住してきた理由」、「母袋の魅力」、「母袋の欠点」の三項目についてそれぞれ該当すると思われる部分を抜き出し、項目ごとにKJ法で整理した。

その結果については、別表の通りである。なお、表中に「*」が付いた項目は複数の対象者から指摘のあった項目である。

1:母袋に移住してきた理由		
田舎暮らし	*景観が良い	山で生活してみたかった
	星が綺麗	自給自足がしてみたかった
	空気が澄んでいる	「理想郷」という謳い文句に惹かれた
	百姓をしてみたかった	
家の事情	*親がいるから	子どもが巣立った
	子どものために広い土地が欲しい	主人についてきた
	家を継ぐため	
住環境	*家があった	もとの家に近い
	古民家が気に入った	家を新築した
個人の事情	友人がいた	呼ばれた
	馴染みの土地	
仕事の事情	退職	店じまいをしたから
タイミング	都会が嫌になった	

2:母袋の魅力		
田舎暮らし	簡単に行ける	百姓ができる
	体育館・集会所がある →地域づくりで使える	地に足つけて仕事できる（一次産業）
	行政サービスが行きとどいている (TV・ネット・電気・上下水道)	
地域の良さ	*受け入れてくれる・歓迎してくれる	たくさん話せる 人間関係が良い
	みんなが仲間	助けてくれる・励ましてくれる
	声を掛け合う	
自然	*景観が良い（朝が幻想的）	四季を感じられる
	*自然が身近	雪が多い
	星が綺麗	空気が澄んでいる
宴会集落	*みんなで楽しむのが好き	宴会が多い
	開放的	酒が好き
	集まりがあればみんな誘う	
地域活動	*つながりが強い	みんなで話し合いができる
	*新しい活動に協力的	自治会の参加意識が高い
	楽しい	
個性	いろんな生き方ができる	都会の時間軸に縛られない
	いろんな生き方ができるプロがいる	いろんな考えのひとがいる 個性豊かな人が多い
治安	不審者がすぐわかる	犯罪が少ない
	子どもを放っておいても安心できる	鍵を開けていても大丈夫
地理環境	アクセスが良い	下りれば店がある
	2車線で広い	スキー場がある
個人の良さ	穏やか	分別をつけられるひとが多い
	優しい	

3:母袋の欠点		
インフラ	街灯がない	行政が企画を理解する力がない
	車がないと生活できない	行政に対する地域の企画力が低い
	病院が遠い	車で 20 分の店が遠い
	公共交通機関が発達しない	
人付き合い	付き合いにお金がかかる	見られている
	葬式に手間がかかる	初めは人付き合いに苦労した
	近所づきあいで気を使わないとい けない	こだわりの強い人がいる 飲みすぎ
環境	*雪が多い・除雪が大変・寒い	貸せる家がない
	山に囲まれている閉塞感・圧迫感	大和町三大僻地
	すぐ暗くなる	
田舎の闇	活動を快く思っていない・ひがみ・ 卑屈	いろんな考えを持つ人がいるから まとまりにくい
	I,U ターンの人とずっといる人と の間に溝がある	ずっといるひとが活動に消極的 施しの習慣が煩わしいことがある
少子高齢化	デイサービスが欲しい	助けが必要
	高校を出たら子どもが帰ってこな い	面倒を見る人がいなくなることへ の不安
	自分のことで精一杯になる	
職がない	やりたい仕事はない	母袋内の仕事だけでは収入が少な い
	外に出ないと仕事はない	
	農業をしても赤字	
地域活動	祭が 10 年に 1 回なのでもったい ない	仕事があると参加できない ハード・多い

(3) 調査により見えてきた母袋の特徴

調査の結果、同じ内容でありながら視点が異なる項目を複数発見した。そのような項目について理解することが、住民全員が納得できるビジョン作成のためには必要であると考え、以下の表にまとめた。

表裏一体となっている項目		
体育館・集会所がある →地域づくりで使える	⇔	街灯がない
行政サービスが行きとどいている(TV・ネット・電気・上下水道)		病院が遠い 公共交通機関が発達しない
下りれば店がある	⇔	車で20分の店が遠い
地に足をつけて仕事ができる(一次産業)	⇔	外に出ないと仕事はない
百姓ができる		農業をしても赤字
雪が多い(魅力)	⇔	農業をしても赤字
新しい活動に協力的	⇔	雪が多い・除雪が大変・寒い
みんなが仲間		ずっといる人が活動に消極的 活動を快く思っていない・卑屈・ひがみ
声を掛け合う(魅力)	⇔	I,U ターンの人とずっといる人との間に溝がある
いろいろな考えの人がいる	⇔	見られている(欠点)
個性豊かな人が多い		
分別をつけられるひが多い		
助けてくれる・励ましてくれる	⇔	助けが必要

行政サービスやお店までの距離といったハード面での差については、基準とするものによって大きく違ってきてしまう。母袋のハード面について、道路整備等の行政サービスは行きとどいているが、人によっては病院や交通機関も「行政サービス」と考えたり、車で20分の距離を遠いと感じたりするため、事実として上がった項目についてより検討した上で長所とするか短所とするかを考える必要がある。

農業に関わった2項目については、農業はできるがそれで生計を立てていくことは難しく、自給自足とご近所さんに配る位までの規模しかできないということが考えられる。また、雪が多いという気候についても、人によって見方が変わってくると思われる。これらについては、移住者が求めるものによって長所か短所かが大きく左右される。

長所で「新しい活動に協力的」「みんなが仲間」と書かれた項目については逆向きの指摘

もあり、一部の人たちのみがそう思っている可能性が考えられ、もしそうであるならばビジョン作成の進め方における留意点となるであろう。現に母袋以外においても同様の問題は指摘されており、無視することはできない。しかし、声を掛け合い、分別をつけられる人が多いという母袋の長所をいかせば、この問題を解決させることは可能であろう。

一番下の項目は、現状としては問題点としてあまり顕在化はしていない。しかし、将来のことを考えた際には必要となってくる問題点であると考えられる。

4. 分析のための視点整理（花木）

移住に関心がある人にとっての一般的ニーズを知るため、それに関連する調査を行った参考資料を探したところ、内閣府の資料と、宮城県亶理町の2つの資料が見つかった。本節では、これらを全体的なニーズと年代別のニーズに分類し、一般的な移住のニーズとして整理した。

(1) 第一回まち・ひと・しごと創生会議（H26. 9. 19）『「東京在住者の今後の移住に関する意向調査」結果概要』は、東京都在住の18～69歳男女1200名を対象とした調査である。この調査から、今回の視点整理に有効だと考えられる部分を抜き出したところ、以下のようになった。

〈ポイント〉

・東京在住者の4割（うち関東圏以外出身は5割）が地方への移住を検討、又は今後検討したいと考えている。特に30代以下の若年層及び50代男性の移住に対する意識が強い。

〈全体〉

- ・働き口が見つかりやすい
- ・日常生活や公共交通の利便性が高い
- ・生活コストが低い
- ・医療、福祉移設が充実している
- ・移住に関する情報が豊富であること

〈年代別〉

- ・10～30代女性→結婚、子育てができる環境
- ・60代男女→退職後に2地域居住ができる場所
- ・30代、50代男性→スローライフが実現できる場所

(2) 第二回亶理町まち・ひと・しごと創生総合戦略委員会（H27. 12. 21）『移住・交流・定住に関するアンケート調査結果』は、東北地方への定住の可能性とその条件、また、東北地方への来訪（交流）の可能性とその条件を探るため実施されたものである。移住調査の対象地域は東北・北関東10県（青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、新潟県

茨城県、栃木県、群馬県)で、対象年齢は15~74歳の男女、サンプル数は5000となっている。全16の設問の内、今回の視点整理の参考になり得ると考えられる3つの設問を抜き出し、以下に整理した。

①移住等をするとしたら何がしたいか

〈全体〉

- ・老後を豊かに過ごしたい
- ・景色や環境、気候の良いところで生活したい
- ・地方都市で快適な暮らしがしたい

〈年代別〉

- ・若い世代（主に15~34歳）→地方都市で快適な暮らしがしたい、自分にあった仕事に就きたい、田舎の広い家での暮らしを楽しみたい、自然の多い環境で子育てをしたいなど
- ・高齢層（主に65~74歳）→老後を豊かに過ごしたい、家庭菜園(体験農業)やガーデニングをしたい

②移住等を検討する際に不安なこと

〈全体〉

- ・老後の暮らし、医療・福祉環境
- ・働き口が見つかるか、うまく起業できるか
- ・利便性（日常生活、公共交通）
- ・人間関係
- ・暮らしにあった住宅が見つかるか

〈年代別〉

- ・若い世代→働き口が見つかるか、うまく起業できるか、利便性、子どもの教育環境、子育て環境
- ・高齢層→老後の暮らし、医療・福祉環境

③移住等を検討する場合、どのような支援が必要だと思うか

〈全体〉

・就労支援、当面の間の経済的支援、住宅の情報提供、仲介支援や家賃補助といった経済面での支援が求められている。

- ・情報提供に関しては、インターネットによる情報提供を求める声が多い。

〈年代別〉

- ・若い世代→インターネットによる情報提供、就労支援
- ・高齢層→地元住民との交流機会

(3) 視点整理

上記項目をチームで検討し、特に重要だと思われる8項目に整理した結果が、以下の通りである。

〈全体〉

- ・ 景色や環境、気候の良いところで生活したい
- ・ 生活コストが低い
- ・ 日常生活や公共交通の利便性が高い
- ・ 医療、福祉施設が充実している

〈年代別〉

- ・ 若年層→子育てができる環境
- ・ 30代、50代→スローライフが実現できる場所
- ・ 高齢層①→2地域居住ができる場所
- ・ 高齢層②→家庭菜園(体験農業)やガーデニングをしたい

5. 分析 (花木・田中・川合)

本節では、3節でまとめた「母袋に移住してきた理由」、「母袋の魅力」、「母袋の欠点」の3項目と、前節で整理した「移住に関心がある人にとって特に重要だと思われる8項目」を見比べて、「母袋の長所」、「母袋の短所」という形でまとめ、簡単な分析を行った。

(1) 全体ニーズ①景色・環境・気候

長所：景観が良い(朝が幻想的)、自然が身近、星が綺麗、四季を感じられる、雪が多い、空気が澄んでいる、家があった

短所：雪が多い・除雪が大変・寒い、山に囲まれている閉塞感・圧迫感、すぐ暗くなる、貸せる家がない、大和町三大僻地

都市部から離れている、高山地帯といった地理条件であるだけに、景観の良さについては多くの方が長所として挙げている項目の一つであった。

その反面、山による閉塞感や圧迫感といった感情を抱くことや、日照時間が短いことを短所とを感じる方もいることから、自然を身近に感じられることは必ずしもいいことばかりではないことが見受けられる。また、積雪量が多いことは人によって長所とも短所ともなり得る。長所だと感じることは、あまり積雪量が多くない地域から移住してきた人や、雪かきなどの除雪作業を苦だと思わないタイプの人だろう。

山の迫り方や冬の厳しさなど敬遠される場合もあるが、豊かな自然に支えられた母袋の景観は、移住者を呼び込むための大きな魅力である。

(2) 全体ニーズ②生活コスト

長所：自給自足がしてみたかった

短所：車がないと生活できない、病院が遠い、公共交通機関が発達しない、車で20分の店が遠い、付き合いにお金がかかる、葬式に手間がかかる、雪が多い・除雪が大変・寒い、自分のことで精一杯になる、農業をしても赤字、母袋内の仕事だけでは収入が少ない、地域活動がハード・多い

母袋には農業などに利用できる土地が豊富に存在するため、自給自足をしたい人にはもってこいである。しかし、買い物一つするにも車が必要になることや、平均年齢が高いにもかかわらず病院が遠いこと、田舎ならではの慣習に裏付けられる、人付き合いに係る出費など、決して生活コストが低いとはいえない要素が多いことは、移住者を呼び込む上で課題となってくる。

(3) 全体ニーズ③利便性

長所：簡単に行ける、行政サービスが行き届いている、インフラが整備されている、アクセスが良い、2車線で広い、下りれば店がある

短所：車がないと生活できない、公共交通機関が発達しない

行政サービスや、電気・上下水道などのインフラが整っており十分な生活ができることは強みと言えそうだ。また、最寄り駅（ふもと）より車で20分、という位置にあることから、アクセスについての長所も挙げられた。ただし交通手段は車に限られるため一概に利便性が高いとは言えない。

(4) 全体ニーズ④医療・福祉施設

長所：該当項目なし

短所：病院が遠い、デイサービスがほしい、助けが必要

地域内に病院や福祉施設がないため、短所として挙げられた。最寄りの病院まではふもとへ下りなければならず、急用の際や、通うには難しい距離になってくる。どのようにこの点を捉えるが課題になると考えられる。

(5) 年代別ニーズ①子育て環境（若年層）

長所：助けてくれる・励ましてくれる、人間関係が良い、つながりが強い、不審者がすぐわかる、子供を放っておいても安心できる、犯罪が少ない、穏やか、優しい

短所：街灯がない、すぐ暗くなる、近所づきあいで気を使わないといけない、貸せる家がない、大和町三大僻地、高校を出たら子供が帰ってこない

多くの地域行事からもわかるように、つながりの強さ、人柄の良さといったこの地域の雰囲気は子供にとって大きな利点となるだろう。治安がいいこともあり、のびのびとした子育てができる環境を提供できるのではないだろうか。一方、地域から学校が離れているため、子供の通学や進路には不安が残る。貸せる家がなく、移住が現実的ではないことも、課題である。

(6) 年代別ニーズ②スローライフ (30代、50代)

長所：受け入れてくれる・歓迎してくれる、みんなが仲間、声を掛け合う、たくさん話せる、助けてくれる・励ましてくれる、人間関係が良い、景観が良い（朝が幻想的）、自然が身近、星が綺麗、四季を感じられる、空気が澄んでいる、雪が多い、楽しい、いろんな生き方ができる、個性豊かな人が多い、都会の時間軸に縛られない、いろんな考えの人がいる、不審者がすぐわかる、子どもを放っておいて安心できる、犯罪が少ない、鍵をあげておいて大丈夫、穏やか、優しい

短所：雪が多い・除雪が大変・寒い、付き合いにお金がかかる、見られている、近所づきあいで気を使わないといけない、見られている、はじめは人付き合いに苦労した、こだわりの強い人がいる、飲みすぎ

母袋は豊かな自然に囲まれており、そこに暮らす人々の心にもゆとりがあると感じられる。都会と比較して時間的な制約や空間のせまくなるさを感じさせないのは、スローライフに憧れる人にとって非常に大きな魅力になる。しかし、人付き合いや除雪にわずらわしさを感じるのであれば、母袋で心地よいスローライフを送れるとは言い難い。

(7) 年代別ニーズ③2 地域居住 (高齢層)

長所：簡単に行ける、行政サービスが行き届いている、インフラが整備されている（TV・ネット・電気・上下水道）、いろんな生き方ができる、都会の時間軸に縛られない、犯罪が少ない、アクセスが良い、2車線で広い

短所：公共交通機関が発達しない、車で20分の店が遠い、

徳永まで車でおよそ20分であり、名古屋まで高速道路を利用すれば2時間弱で到着できる。多くの人にとって、母袋はアクセシビリティの良い地であり、母袋の住人の良さと相まって、2地域居住に適した地といえるだろう。しかし、20分をという移動時間を長いと考える人や、車を持たない人、地域活動が多いことを煩わしく思う人にとっては、2地域居住に適さないだろう。

(8) 年代別ニーズ④農業・ガーデニング (高齢層)

長所：地に足をつけて仕事できる（一次産業）、百姓ができる、助けてくれる・励ましてくれる、人間関係が良い、自然が身近、空気が澄んでいる、つながりが強い、

短所：雪が多い・除雪が大変・寒い・農業をしても赤字

自然が豊かで空気も澄んでおり、農業を行うのに必要な条件は揃っている。そして、農業に関する知恵をたくさん持っており、農業を始めようとする人たちを手助けする人も多いことは魅力的だろう。しかし、これをお節介と捉える人からすれば魅力たり得ない。また、冬場は雪が多いため、とても畑仕事が大変になるが、夏場は涼しい気候を生かして快適に農業ができるだろう。

6. まとめ（川合）

私たちは、「地域リーダー実践（上級）」の講義で母袋地域を訪れ、「母袋地域の将来ビジョンが不明確である」という課題を導き出した。そして、母袋の住民の方々も、私たちと同様の課題意識を持ち、「母袋わくわく夢ビジョン」の作成を目指していることを知った。私たちは、母袋の将来ビジョンを考える上で、手助けになるような情報収集を行うことを授業のテーマとして、以下の調査、分析を行った。

まず、移住者を対象としてインタビュー調査を行い、移住された経緯や母袋地域の良さ、課題点を伺った。そして、①地域おこしの先進事例として取り上げた長野県下條村との比較、②インタビュー内容自体からうかがえる母袋の特徴、③内閣府や互理町の調査を参考にした『一般的な移住の視点』から母袋地域の良さや課題点の分析、の3点をこの報告書においてまとめた。③の分析が一番大きな目的であるためその結果を以下に改めてまとめる。

まず、移住者全体にとってのメリットとして、景観や気候、環境の良さが挙げられる。山間地域に位置している母袋は、都会とは全く異なる景色・気候・環境を有しており、この豊かな自然環境は移住者の求めるニーズに合致する。また、ふもとの徳永まで車でおよそ20分、名古屋まで2時間弱という利便性の良さや一定のインフラが整っていることもメリットである。これは2地域居住を志す人にとっては特に大きなメリットであり、2地域居住を移住地域の選定条件として挙げている高齢者にとって母袋は魅力的な地域だと考えられる。ただし、母袋には医療・福祉施設がない。最寄りの病院まで20分かかることは健康に不安のある高齢者にとっては不都合だろう。

また、自然環境や人の良さを生かして農業を行うのにも母袋は適している。純粋に農業を行いたい人だけでなく、スローライフが送れることを移住先の選定条件として挙げている30代から50代の男性にとっても、母袋は魅力的な地域だと考えられる。しかし、地域内に保育施設や学校がない。中学校まではスクールバスを利用して通学することができるが、高校からは下宿する必要がある。そのため、子育て世代にとっては母袋への移住はハードルが高いと考えられる。

結論として、母袋は2地域居住を考える高齢者や、スローライフにあこがれる働き盛りの男性にとってメリットが大きい地であることが分かった。母袋地域の良さを前面に押し出して移住者を募ることで、母袋地域の活性化につながると思う。

以上が本講義の受講生による分析である。本調査が母袋の夢ビジョンを考える上での一助となることを願っている。

7. 謝辞 (川合)

今回「地域リーダー実践」の講義におきましては、わくわく会の会長である古清水満様や、地域おこし協力隊の吉田雄輔様には大変お世話になりました。また、インタビューに協力していただいた移住者の方々、私たち岐阜大学生を快く受け入れてくださった母袋の方々の存在があったからこそ活動を成功させることができました。皆様方には心の底から感謝申し上げます。

私たち岐阜大学生は、普段は母袋よりもずっと都会の岐阜市や名古屋市、大垣市の周辺で暮らしています。私たちは、母袋を初めて訪れたとき、山奥の集落で交通が不便、病院や学校が近くにない、冬は除雪が大変というような負の側面ばかりが目につきました。母袋地区と協働して授業を進めるにあたり、はじめのうちは、こういった母袋の負の側面をどのように解決すればよいのかという視点に凝り固まっていました。

しかし、授業で母袋の人たちと関わるにつれて、母袋の持つ良さにたくさん気付きました。田舎ならではの、山奥ならではの豊かな自然やおいしい食べ物、なにかある度に宴会を開き、別の家族と深いつながりを持つ絆の強さ、そして、見ず知らずの岐阜大学生の調査を快く受け入れてくれる心の広さに触れました。そして、母袋の持つ魅力をどんどん伸ばしていきたい、広めていきたいと思いました。

母袋には交通、気候の不便さなど、負の側面も確かにあります。しかし、それを上回る、環境や人の良さなどの良い側面があります。交通や気候に関しては、現実的に対処するのが難しい問題ではありますが、母袋の良さを広めたり伸ばしたりすることで、負の側面を上回る魅力的な地区になるのではないかと思います。地域リーダー実践の授業では、地域の持つ課題の解決がテーマとなっていますが、それは負の側面を改善することだけでなく、良い点を伸ばす、広めることだと気付きました。

今回の講義を通しての得た経験や価値観を大学の講義や将来の仕事などに生かし、これからの生活をよりよいものにしていきたいです。

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学 COC 事業）

平成 29 年度 地域リーダー実践（上級）実践報告

編集担当者 塚本明日香（地域協学センター助教）

執筆担当者 塚本明日香（地域協学センター助教 1章,5～7章）

今永典秀（地域協学センター特任助教 2章）

松林康博（地域協学センター特任助教 2章）

大宮康一（地域協学センター准教授 3章）

後藤誠一（地域協学センター助教 4章）

編集・発行 岐阜大学地域協学センター

〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1

TEL.058-293-3880 FAX.058-293-3167

発行年月 平成 30 年 3 月



CCSC 地域協学センター
Center for Collaborative Study with Community